愛國婦人會機關

愛國婦人

愛國婦人會の目的は遺族及癈兵を救護するにあり

櫻花號

さくら

さくらは日本の名花で、神代この方日本人の愛し、今も愛する花である。大方日本人に愛して貰ふと思ふて、神代の前から咲いて待つて居たものであらう、日本人はまた櫻を愛するために出て來たものかも知れぬ、櫻が日本人か、日本人が櫻かよく分らぬ、分らぬがどちらかに相違ない、大和心を人問はゞと、一人總代で詠んで置いたが、うまい事を言ふたものだ、得心である。

櫻は植物學上何科に屬して、花瓣が幾らあつて莖が何うて、葉の形が何んなであるか、そんな事は知らぬ、松岡玄達の「櫻品」に出て居る櫻の種類はまだ足らぬか、故事來歷が拔けて居るか、一切知らぬ、唯櫻は古の人の見たやうな櫻、今の人の見る樣な櫻であつて、斯う見ねばならぬの、斯う感ぜねば不都合だのと無理に強いて眺めさすものではない、櫻は什麽量見の狹い花ではない、萬人は萬人で違へて見せる底の知れぬ花である。

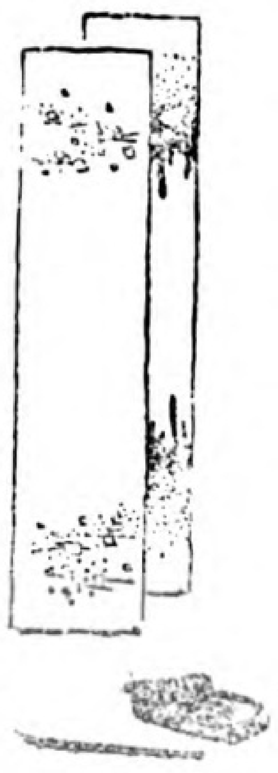
櫻ほど、花で昔から、歌に詠まれ、詩に作られ、樣々の引合ひに出されたものはあるまい。先づ神代では美人に木花佐久夜毘賣といふのがある。佐久夜は開光映で、萬の木の花の中に、櫻は勝れて美しいからの名であるさうな。成程美人は櫻である、櫻の精が凝つて美人になつたのであらう、皇代では古くは禁池の御舟遊に櫻の散りて御盃に入りしを賞して、内裏を稚櫻の宮と名付け給ひし帝もある花を御覽じ、詩を賦して、始て花の宴といふを催させ給ひしは、千二百年の昔である。春の心は長閑からましと、暇ある大宮人すらも、櫻で長閑さを覺へて居るのもあり、しづ心なくと怨んで、長閑さを引延さうとして居るのもある。しかし雲の上の櫻とて長閑なばかりではない、吉野山四帝五十年の春は皆涙ではないか、無常迅速の情を櫻に寄せたものも少くないふりゆくものはと全盛の後には眺め、我身世にふると美人も喞つて居る。入相の鐘にと出家ははかなみ、落花の雪に身の終りを公卿は悲み、或はこの春よりは墨染に咲けと嘆ける在世の人もある。又はふく風をと眺め、ゆきくれてとよみおきたるが如き、花は櫻木人は武士のあはれにゆかしき例をのこしたものもある。或は花の下にて死なんことを願ひ、吉野の櫻に執着の心を娑婆に殘し、或は老の心を櫻に慰め、「六十餘回看れども足らず、他生定めて愛花の人とならむ」と、先の世迄も櫻を看んと願ふた人もある。櫻は一り貴族の花でなく、また平民の花である、唯歌や詩の物でなく、また發句の領分でもある。これはこれはとたヾ呆れたるもあり、これでこそ命惜しけれと底抜け騷ぎをするものもある、こちとらは花が咲うが咲くまいがとすましたるもあり、京住ひして義理に櫻を見てやるといふすね者もある。或は見たらぬで友かへて再び夕櫻を見に出るもあり、物忘れせむため獨り花の下にゆくもある。中には大飯喰ふて櫻を見る境涯を喜び、いづそ花より團子を喜ぶものもあるが、いづれも櫻は櫻で、とり〳〵に面白い。

しかし上手な歌を詠み、甘い句を吐いた者ばかりが、櫻を見たのではない、腰折れ、駄句の本人も、櫻を見て、感じた所を相當に述べた積りである、いや歌も何もよまぬでも、日本人は皆櫻は見て居る、見て皆感心して居る、櫻の花に薰化せられて、日本人になつて居る。櫻はひとり文學を生んだ計りでなく、美術を生み工藝を生み、忠君愛國の士氣を生み、努力向上の精神を生んだのである。日本の男子を作つたと共に婦人をも作つたのである。櫻の德は廣大無限である、從來の日本人が櫻に負ふ所多きが如く、今後の日本人も樣々の新しき敎訓、感慨、奮勵、慰安を奮きに加へて得るであらう。日本人が居るので、櫻も始て咲榮があるのではあるまいか、その日本人に見られやうとて、また櫻は咲き出した、日頃出精勉強しておいて、年に一度の花の誘ひには、背かぬやうしたいものである。

閨秀六佳選の内

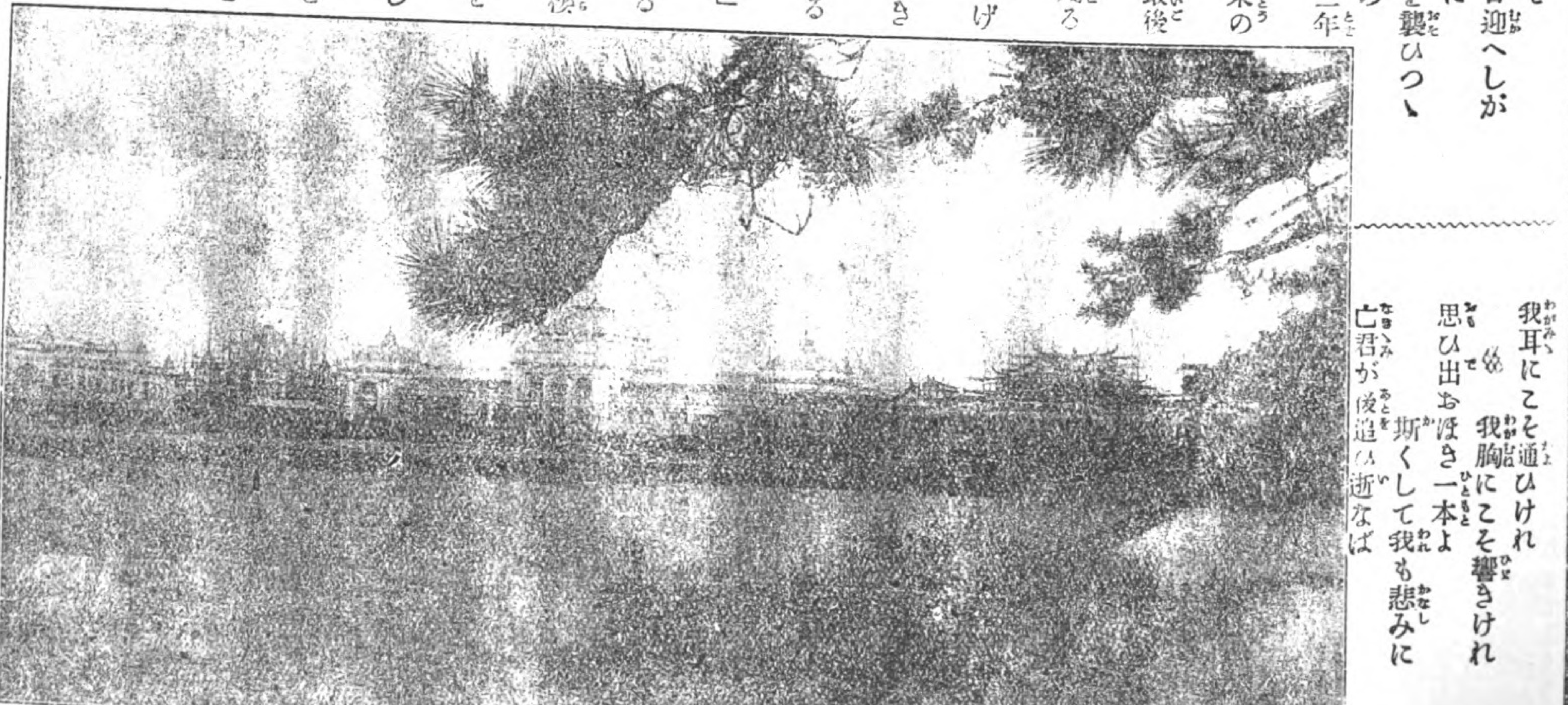
櫻花

茂呂その子



振り分け髮のその昔
　共に見んとて植蒔し
庭の櫻は咲きにけり
　八重の花瓣香は深く
微明ぼの映る朝日影
　朗に霞むしきしまの
大和心と觀るにつけ
　おもひ出多き一本よ
希望の光り願足りて
　手を携えしこの蔭に
君は吟さみぬ愛の曲
　我は唱なえぬ幸の歌

浮世の憂も不知して
　美味き月日迎へしが
嵐群らくもひと時に
　快樂の夢を襲ひつゝ
覺て果敢なき現世の
　榮華破ぶれて玆三年
國の爲とて君はしも
　鉾取りむかふ遼東の
野に醜共を切り靡け
　遂に雄々しき其最後
形見の軍衣血に染て
　櫻のいろと尙ほ殘る
隱袋に在し辭世の句
　讀むも涙の玉くしげ
筐に秘めたる寫眞の
　靈魂返すよしもなき
「身は滿洲の土まん頭
　草葉の蔭に今ぞ眠る
故鄕の櫻咲くたびに
　遙に一枝手向よや」
文字細かに臨終にも
　盡きぬ誠ぞ籠りたる
思ひ出おほき一本よ
　二人で植えし此の櫻
九十九の果の百歲も
　共に看んとて契しを
花は春每咲くめれど
　君はた歸る時もなし
西に垂れたる一枝を
　折て佛間に供へんと
觸る手も漫ろ戰けば
　四ひら二ひら片々と
番ひの蝶と舞て散る
　花にも精靈在けるよ
此は無き君が魂魄の
　來りて花に移れるか
嗚呼懷かしの面影や
　櫻の幹に取りすがり
接吻するやあまた度
　奇しき薰りに恍惚と
夢の浮橋たどるとき
　淸くやさしき君が聲



我耳にこそ通ひけれ
　我胸にこそ響きけれ
思ひ出おほき一本よ
　斯くして我も悲みに
亡君が後追ひ逝なば
　花の主は誰とならん
主人幾人かはるとも
　花よ替らで咲ねかし
咲いて榮えて永久に
　二人が靈を慰さめよ

電話番町五百二十番

◎本號には佐藤評議員佐々木伊藤二幹事の肖像を寫眞版附録とす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

論叢

婦人の社會的活動

日本女子大學校長　成瀨仁藏

女子の社會的活動に就て、日本では未だ一定の確說がないが、先づ其是非を論ずるものを比較して見ると、女子の活動を奨勵せぬ傾向が多數であつて、これには種々の理由もあらうが、先づ左の四件が重大なる原因となつて居ると思ふ。

第一　男女を異る者として區別する事

元來男女は人類たる上に於て異なるものではない、同時に其能力、體力に於ても兩者に同一の境遇を與ふれば、其發達の程度も今日の男女の如く著しき差を生ぜぬのである、其例としては、昔日本にても戰爭に出た婦人もあり、農業或は海士の如き仕事に於ては男子に劣らぬ勞働をなして居る、又文明國にて男子と同等の教育を受けたる者には、文學なり、美術なり、宗教なり、男子同等の發達をなせる婦人が澤山あるのを見ても、男女の能力體力が先天的に差あるものとするは甚だ間違つた考へであると思ふ。

素より男女の天分は自ら異なるもの、存するは云ふまでもないことではあるが、日本にては從來餘り男女の區別を立て過ぎる爲め、却て女子の發達を害して居ると思ふ、即ち學校教育に於ける教科書等も男子用と女子用とを區別し、女子には簡單なものを授けて居る、次には又家庭教育に於ても、女子は幼少の時から其舉止動作を女らしいと云ふ範圍内に束縛して其發達を妨ぐること恰も支那婦人が靴を用ゐて足を不具にすると少しも異なる所がないのである、夫れて斯る教育を施されたる結果として、第一獨立心なく、思考力とか研究心とか云ふものを全く失つて居る、又意見が有つても發表し得る勇氣に乏しく、是非人に依賴せねばならぬ所謂厄介者が多いのである、此れ即ち女に仕過ぎて人としての發達を沮止したるもので、婦人の爲めには甚だ悲しまねばならぬ現象である、夫れであるから女子の能力は自然の儘發達させ、決して人工的の女子を作つてはならぬと思ふ、先づ自分の考へは能力に於ても體力に於ても、決して男女異なるものでないことを信ずるのである。

第二　女子は育兒と出產の大任あると云ふ事

此れ又一應は尤の樣にも聞えるが、育兒に就ては男子にも又責任あることて、單に女子にのみ一任すべきものではない、假令ば農家商家の主婦は、夫の家業を助けながら家事の整理も育兒の事も充分に盡して居るから、苟も教育あり地位ある婦人は只育兒や家事にのみ甘んじ居らるべきではないと思ふ、今日の日本社會は慈善事業、宗教、教育、美術、或は文藝趣味を廣むることに就て婦人の活動を甚だ要求して居る、夫であるから教育あり地位ある婦人が外に向つて活動することは、社會に取つて甚だ必要なことである。

第三　社會的活動と齊家の事

一身を修め得る者にして始めて國家を治め得る如く、一家の主婦にして能く一家を齊へ得ざるものは、決して社會の事に眞に盡し得ることは出來ぬ、夫れで能く家を齊へる婦人はまた必ず社會事業にも力を盡すことを得るのは確かである、殊に慈善事業とか宗教上の働は、自然人格を高尚にするから、心が大きく知識も廣まり、却て良妻賢母たるを得るのである、斯る婦人にして始めて夫の相談相手ともなり、兒女を立派に育て上げることが出來るのである、之に反して常に家居の多き婦人は見聞狹を以つて知識を得ることも少なく、同時に精神の進歩する機がないのである、夫れて斯る婦人は只臺所の取締りとか家事の整理には不都合なくも、母として夫の友人として一家の主婦としては甚だ物足らぬとが多いと思ふ。

第四　從順の德を害すと云ふ事

獨立心が强く、國家的の觀念があつて、さうして實力ある婦人を稱して從順を缺くものと思ふ人もあるが、これは甚だ間違つた考へである、今日家庭の紊亂、夫婦の不和、或は妻に不滿足を云ふ人の多くは、皆意苦地なき婦人を妻としたる人である、依賴心の多い婦人は常に夫に向つての要求が多いから、男子は爲めに少なからず心を勞するのである、これに反して獨立心强き婦人は夫を助くることを心掛けて居るから、夫に對する同情心もあり、成る可く夫に心配をかけぬやうに注意して居る、其れて男子は不快を感ずることが少ない、こゝに於て始めて夫の友となり眞の從順となるのである、意氣なき婦人の從順なるは盲從に類することが多いので、表面穩なるにも係はらず一家に取りては眞の平和を得られぬことが多いのである、これを以つて見ても女子の活動は、決して從順の德を損ぜぬと云ふことが明らかである。

前述の如く國家社會の組織は男女が要素となりて文明を來たすので、決して女子は別物でない、然るに今若し女子の身體弱く、或は精神上の發達が男子と伴はぬ場合は、終に社會は不健全とならねばならぬ、又經濟上から論じても女子は何事も人に依賴し、家庭社會の厄介者にては國家が段々おくれるのである、故に女子が社會に對して何等貢獻する處なき國は段々衰頽してゆくことは爭はれぬ事實である、殊に現時は國家の發達もます／＼國家的となり、社會細胞の一なる女子の活動を促がすやうになつて來て、家庭の改良を計るにも、他の家庭の有樣を見聞せずしては改善することが出來ぬと云ふやうに、總ての思想の進歩と共に、既に社會の組織が從來の如く婦人に家居のことを許さぬ有樣となつて居るから今日日本の輿論は女子の發達を餘り奬勵せぬにも係はらず、事實はこれと反對に、東洋の舊慣を全く破りて女學校が年々增加し現に高等師範や女子大學に學ぶ者も甚だ多く、且つ、官途に就く婦人さへも出來るやうになつたのである。

要するに女子の社會的活動は、國家の發達上甚だ必要なるとて、又婦人自身に取りても有益てある、日本婦人は國家の爲め社會のため、尙ほ小にしては家庭の爲に、大に活動しなければならぬ。

華族世襲主義に就て

文學博士　高楠順次郎

華族世襲主義の排斥は、板垣伯が最後の敎訓として我々に與へられた所である、我々も伯の意のある所は十分に諒とするので、大に贊成を表すべき點もある、併しながら伯は爵が一代限りて子孫に及ばぬと同じ樣に、賞も一代限りて子孫に及ばぬが眞理であると云はれた、これは一應尤もに聞へて、甚だ不條理の論法である、賞罰はその當人を本位としてこれを附與すべきは勿論である、そこで個人本位の國柄では、本人既に死して恩賞を與ふることの出來ぬ場合は、遺族を扶助するに止まる、この精神は甚だ美なる所であると思ふ、我國の如き特別の國體を有せる所では、罪にしてもその罪を憎むで其人を憎まずと云ふて、國賊として一旦爵してもまたこれを宥して其の先功を賞揚する如き美風が存して居る、そこで三族を夷するとか、父子夫妻罪に處すると云ふことは、一朝にして廢せられた、惡い方は成るべく少限にして、善い方は成るべく廣くするのが國家の良法であらう、殊に家族主義の國では、その子孫、その同族に榮譽を分たしめ、その一門を激勵して、その祖先の例に隨はしむる國家的敎訓が必用であるから、死人に贈位、贈爵、贈祿等のこともあり、甚だしきは官名を贈り、學位を贈り、師號を贈る、又頃日の如く勳章、年金を死人に贈りてその榮譽を表章する、その上招魂社の如き處に於て、神として之を祀り、國家はこれに對して相當の敬禮を表する、所謂天恩枯骨に及ぶものとしてこれを榮とする、西洋人から見たら分らぬ點もあらう奇妙に感ずる所もあらう、されどこれが即ち個人本位に非ずして、家族を本位とした國の自然發達の結果である、これは賞爵のみに就て云ひ、殊に死後恩賞のことのみであるが、授爵の一事は又更に趣が違ふて居る、その功を賞してこれに授くる點では、一般の賞與と異るなしと雖も、一般の賞與が成るべく個人的なるに反して、授爵は家門の地位を高くする爲めのもので、幾分か「家名」の如きものである、殊に始めから族稱として與へられ、子孫繼承の主位に在るものとなつて居るその族稱が子孫に及ぶは至當であると思ふ、併しこれは一般の議論として、伯の恐れらるゝ處は、皇室の藩屛としてその職を盡す能はざる子孫が、その名を汚すを憂へらるゝに在る、この點は大なる同意を表すべきである、勳功ありし人の子と孫とがその父祖の恩澤で生活し、榮稱を有せるは、誰しも望む所で異議はないが、その後裔が而かも他より擯斥せらるゝ程の行跡あるにも係はらず、榮名を持するは皇室の藩屛にもならず、家門の名譽でもない、夫れ故三代の後には順序一代々々に一爵を降し、侯は伯となり、伯は子となり、子は男となり、男は單に華族となる、華族は士族、平民となるやうにしたらよからうと思ふ、皇室典範で皇族の御方々は、親王より庶王、庶王より華族と段々降下あるに、華族のみは先祖の爵名を維持し、役所の受附にも伯爵あり、會社の馬方にも侯爵あり、高利貸の親類にも公爵ありと云ふ風では、誠に殘念の次第である、この邊は何とか工風のありたき事に思はれる、さすれば伯の心配も自ら除かるゝことになるてあらう。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

小説

閨秀六佳選の内

朧夜

森田竹子

私や深山の櫻の花よ
　よしや此のまゝ朽ちるとも……

今暮れた而巳の春の宵、靄の中から洩れた馬子唄餘韵長く引いて駒の鈴の音と共に彼方の森影に消えてゆく、月は羅綾に包まれた樣にボウと淡い光を山櫻の上に照してゐる、向ふの谷川から清い河鹿の聲が聞えて一段と春の趣を添へた、路芝の上に腰を下して休むで居た男女の兄弟、各自に勝手な事を思ひながら暫時無言であつたが、姉は唐突

『猛樣河鹿の聲は實に美いねえ』と云つたが返事が無いので『猛樣てば如何したの、何考へてるの?』

『僕はねえ姉樣、今馬子が唄つて通つたでせう、私や深山の櫻の花よ、彼の唄が何だか姉樣を唄つた樣な氣がして急に考へ出したんです、僕は眞實に姉樣に感謝してるんですよ』

姉はホヽと笑つて

『何を感謝してるの?、何言つてるのねえ猛樣は櫻の香に醉ふて浮言いつてるの、それぢやもう歸りませう』と立たうとする、猛は其には係はず

『何程お祖母樣が丈夫だからつて最早七十でせう、其程老人を相手に姉樣は何處へも嫁かず留守居して下さるんですもの、僕那樣事思ふと何だか學校へ行くのが厭に成ちもうんです』

『亦猛樣が那樣詰らない事を……、如何してそう氣の弱いわからずやなんでせうねえ、私達を氣の毒と思ふたなら尚ほ更ら學校の方を精出さなければなら無いぢやありませんか』

とたしなめる、實際猛は姉に叱られた如く誠に意志の薄弱な子である、天性でもあらうが又境遇が然らしめたのでもあらう、猛の姓は河村と云て村内での資産家で、調度の物は何一つ不足はないが、家庭は實に淋しいのである、姉が十五猛が五つの可憐盛の時、父は苟且の病が本に成て遂々殁られたので、母と祖母とは必死に成て此姉弟を育てながら、作男の二三人も置いて馴れぬ農事の世話をして居た、斯うして猛は女ばかりの家庭に若き主人公として餘りに大切に餘りに甘やかして育てられた故か、兎角心が女々しく、そして世間の事情と一切御存じないお坊樣なのである、併し村内では猛が一番のお山の大將として幅を利かせてをつた、否利かせられて居たのだ、かうしてある中滿ちて缺くるのでなくて、死の神は何處迄此哀な家庭を苦しめ樣とか、又去年の夏時鳥の音づれる頃猛の母を奪ひ去つた、一家の愁傷は更なり家の所理に一方ならず困つた、親戚の或る者は猛の姉の範子に養子を迎へたら宜からうと云つたが、範子が肯はず、祖母樣と二人て猛が成人する迄留守居を仕樣と云ひ張のて遂に左樣極つたが、老母と娘ばかりで四五人の男女を使ふ氣遣は容易でない、猛は昨年の春東京の某中學へ這入たが、家迄は一日の中に往復が出來るので初の程は土曜日毎に家へ來たので、姉は餘り甘やかして育てたのをほと〳〵悔むで居つたが、一學期過ぎたらば馴たと見えて來なく成つた、今度は春休に來て夕餉後二人で散歩に出たのである。

『ねえ猛樣、近所には彼の樣にお心正しい叔父樣も入らつしやる事だから、家の事など心配せず、是からは一生懸命になつて勉强するんですよ』

『は、了解ました、必度勉强します、姉樣樂んで待つてゝ下さい』

と猛は今迄にない明白したいひ樣、姉は微笑して爛漫と霞に匂ふ櫻を望むだ。河鹿は微妙な聲で絶えず春の詩を歌つてゐる。（をはり）

東西名婦傳

墨染櫻

須藤求馬

△鐵師禪尼

今は昔、甲州鹽山といふところに、法身和尚といふ高僧あり、妹あり、伊勢女といふ、伊勢女幼き時より佛道に心を委ね、一心不亂佛名をのみ唱へける、然るに生れつき人に勝れて美しかりければ、袖褄曳かんとする者多く、或は千束の文のかづもうるさく、今は我身をうたてく思ひ、鐵火を我が面に押當て、見苦しき顔となして遂に尼となり、佛法修行の本意を遂げたり、鐵師禪尼是なり、其時よみし歌に曰く

我面うらみてやくそ鹽の山
　あまのたく火と人や見るらむ

△自正

延寶三年奧州白川の士、藤戸大三郎といふものに馴染を重ねし大阪新町茨木屋内錦木といふ賣女、大三郎の死を聞きて出家せんとせしを、容顔美麗なれば人々呼迎へんとするにうるさかり、顔うるはしき故にこそと、鐵杓子を燒きて面にあて、鐵眼和尚に請ひて遂に其の弟子となり、名を自正と改め號し、大阪長町裏に庵を結びて行ひすまし、泥中を出てたる蓮の如きいと高潔なる生涯を送りしとぞ。

咲きみてる花の林をひかしてかゝり床しき
　春風そ吹く
浦月子

花の跡

岩野泡鳴

夢に花咲く
　その花を
君がゐがほと
　愛づれども、
醒めてはいつか
　色もなく、
香もなき跡の
　わがむくろ

うつゝに照らす
　日のかげを
君が御顔と
　仰げども、
勞れてまたも
　光なく、
かげろふ末の
　わがこゝろ。

夢にうつゝに
　われはたゞ、
たゞ戀をこそ
　戀ふるなれ。

閨秀六佳選の内

お角櫻

伏島たき子

上野の國大間々驛より、一里ばかりへだゝれる、新川村にお角櫻とて、名高き一本の絲櫻あり、さる農家の庭中に立てる老樹にて、今より、四百年以上もへつらん、この家の祖先にお角と名づけし、みめ麗しき女ありき、その性任俠、男子の如き、ふるまひのみ、したりしかば、いつとはなく、名、郷間にしられぬ、さはれ、さすがに、女の、心優しきふしやありけん、この櫻をわが子のやうに、いつくしみ、花の朝、青葉の夕はさらなり、老いて臨終のきはまでも、花の將來をのみ打ち案じ、身は死するとも、靈は彼の樹にやどらんなど、いひ續け、つひに息たえにきとか、それより、里人のかく、呼び慣はしつるよし、元より由緒ある傳說ならねば、事の眞僞は定めがたけれど、その名、をちこちにひゞき渡りて、花時賑はふも道理や、幹の太さ五六尺あるべく、丈は、さのみ高く見えねど、綱數十尺はあるらん、枝は、方十數間に生ひひろごりて、柳よりも、こまやかに長くたれ、殆ど地にひかんばかり、花總々と咲きみてるさまの、えもいはず、たをやかに、美しきは、めでにし人の姿かとも思はれ、吹く風に、靡き、もまれながらも、亂れざる、風情のけだかきは、その人の心ばへにも喩へつべし、あはれ、春の花神やこもるらん。

いさきよき心の花の絲櫻
　なかき榮を見るそうれしき

眞心のこほれてにほふ山櫻これやみ國の花にはあるらん
浦月子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

女學生の新婦と召使

評議員　棚橋絢子

この頃は、婦人の學問することが盛になつて、東京では隨分女學校が澤山になりました。澤山になりましたが、それですら、何處も彼處も滿員で、缺員がない位でございます。さて是等の多くの女學生が、三年や五年の間學校生活をして、やがて、年頃になつて、お嫁に行く時分に、丁度學校を卒へるといふ都合になります。が、それなら、その學校を卒業すると直ぐに、お嫁に往つて、一家の主婦たるに恥ぢぬやうに、家政を司つて行かれるかと申しますに、それはなかく〳〵難しいてす。學校では、唯書物を習つたり、數學を習つたりする計りて、家庭の實用のことは、殆ど敎へないのですから、まあ、差詰、學校を出たばかりでは、何のお役にも立ちません。それを世間には、學校では、すつかりお嫁に行く仕度を敎しへて、御飯を炊くことから、御菜を煮ることまで、すつかり敎へる所と思つてゐる方がありますが。これは飛んだ考へ違ひです。學校でも、家庭に實用的に役になることまで敎へたいのですが、なかく〳〵そんな暇がありません。僅かの時間に、學科を敎へて、煮炊きまでを敎へることは到底出來ませんから、家庭に在つて女學生の方は、自ら進んで家事のことを手傳ひ、いろく〳〵の料理や煮炊を稽古しなければならぬ。何でも女中や召使に任せて、自分は、唯口先ばかり働かしてゐては、何等の得る所もなく、また自分が口で云つてゐることゝ實地に當つてやることが違つてゐることが隨分あるものですから、實際に下女を使つて行くことが出來ません。實際行はれぬことを下女に命令ければ、下女は、あれは只口先ばかりて、さうは行くものでない、出來るならやつて御覽なさい、と云つたやうに、大いに侮蔑の態度を取るものです。下女や召使に主人が侮蔑されては、その主人は到底人を使ふ資格がないと云つても宜しいです。何でも、家事向一切の事は、自分が能く研究して、心得ての上でなくては、他人を使つて行くことが出來ません。ですから、まだ學校生活をしてゐる方は、自ら勉めて家事向のことに手を出し、せつせと活潑に、尻輕に働かねばなりません。て、學校が卒へるなり、直ぐにお嫁に行つてる人を見まするに、どうも女中などを能く使ひこなして行くとが出來ません。それは何故かと申すに、口先ばかりで、あゝ爲、かう爲と云つても、實際、御飯一つ炊くことが出來ないからてあります。かやうに學生から、がらりとかはつて、一家の新主婦となつた方よりも、山出しでも、實地に經驗した女中の方は、實際、實用に立つて、いろく〳〵多く家事を知つてゐるから、新主婦なる人は、これを口車に載せて「お前は上手だから、これを斯うやつてお呉れ」「私には、何うも難しくつて出來ぬから、お前が旨くやつてお呉れ」と、云ふやうに、丁度、子供をおだてゝ泣かぬやうに、調子を取ると同じやうにやらなければなりません。女中なんかは、無敎育なものが多いのですから、これ等の調子を旨く取らぬと、直ぐ腹を立てる、腹を立てると從うて用事が却て捗らぬものです。給料を出して置くもので、初めから、使ふものと使はるゝものと、ちやんと區別が付いてゐますが、いざ使ふことになると、なかく〳〵難しいものです。又、使はるゝ身から云つても、旨く使ふ主人は少ないと云ふことになるのです。何でも、使ふ者は、餘り無理を云つたり、劇しいことを爲せたりして、とにかく感情を害はぬやうにして、旨く無敎育者をおだてゝ操つて行かなければなりません。そこを旨くやらないで、彼方は家來だ、召使だ、主人の命令を聞くのは當然だ、と云つて、意張臭つて、つんけんした調子で命令すると、何うしても下女は云ふことを聞きません。若い人の女中を使ひこなせぬのは、其所にあるのです。或る立派な所の奥樣で、女中を五六人も使つてゐる人が、云はれたことがあります「下女を使ふことは難しいもので、五六人も居りますと、喧嘩はしますし、又、此方のやり方が不公平だと申しましたり、實に世話が燒けて、世話が燒けて、私なんか、毎日、女中の機嫌を取つてゐるのが一日の務のやうなものです」と、云はれたが、まあ、そんなものです。旨く、おだてゝ使はぬと、却て此方が使はるゝやうになります。

錠前を開ける子と開けられぬ子

東洋幼稚園主　岸邊福雄

子供を善く仕立るには親が成るべく干渉せず、怪我の無い樣に注意しつゝ放任して、自己の力で立たしむる工風を計るが上策かと思ひます、今日の日本の子供は上流社會程保護が強く、干渉が多くて、子供の獨立心を失ひ、開發することが遲く、私の處へ子供を預かつて呉れいと依賴する人がありますと、先づ其家庭の狀況を審かにして後ち入園を許し、其子供が來た翌日直ちに私は試驗を施します、それは二つの部屋があつて、一つの部屋の錠前は西洋錠でも最も容易に開きますが、一つの部屋の錠前は容易に開くことが出來ません、そこで第一に容易に開く分の錠前ある部屋へ連れて行つて、外から之をピッシャリ閉めて仕舞ひますが、これは大概の子が容易に開けて出ます、それで第一の試驗がすみ、第二の試驗に移りまして、開けることの困難なる錠前の部屋に入れて、これまた外からピッシヤリ閉めますと、内から開けて出やうとするが、今度は容易に開けられません、一度試み、二度試み、三度試み、種々に手を替へ品を替へ、其目的を達するまで絶へず行ひ、遂にこれを開き得るは勇氣あり、氣象の強い、獨立的精神のある子て、家庭に於ても甚だよく敎育されたる兒て、其家庭を尋ねると多くは貧困なる家の子でありまして、斯くの如く奮鬪を試みて出たる子は、私の敎授手帳に甲の標を付けて、仕立てるに骨の折れぬ希望多き子として預るのであります、然るにこれに反して其錠前を開け試みて、開かぬと誰れかゞ開けて呉れるものと思ふて、再三これを試みずして、手を束ねて待つて居る兒がある、中には只泣ひてこれを訴へる子がある、是等は要するに親が餘り保護し過ぎたる子で勇氣なく、人に賴ることの多い子であると云ふことが證明されまして、昨日親が預ける時の言葉には、實に立派に育てゝあるやうに申されるも、其實は保護し過ぎて獨立的精神のないものが多く、斯る勇氣のない子は私の手帳に乙と記されて、其後の敎育に十分注意してこれを矯正することにつとめて居るのであるが、此試驗方法は百中百發誤ることなく、其子に對する將來の敎育方針を立てる好き基となります。

買物心得

某夫人

▲氣取屋買ひ　人々の氣質によつて買物の仕方にもいろく〳〵ありませうが、其中で一番よくないのが何時も自分は豪いものゝやうに傲然と高く止まつて、商人に對する恰も召使ひの如く、商人の持つて來るものとさへ云へば善惡によらず何品でも貶し、其上商人に向つて頻りに小言を竝へることであります、此れは多く女學生上りの奥さんとか、貴族ぶる人にあるやうに見受けますが、この氣取屋買ひは甚だ不經濟となるのであります

▲殿樣買ひ　次には又殿樣買ひとでも名けませうか、此れは自分で買ふのではなく、商人から買はせらるゝ種類であります、即ち物品に對する眼識を有せず、又他と比較して見るでもなく、只商人の云ふなり、運ぶなりに任せて買物をしますが、之れは從來の日本の主婦の狀態で、此る類は多く奸商の爲めに欺かれて居るのであります、

▲商人と同趣味　物品を賣捌くことは素より商人の目的でありますから、快からぬ客の小言も甘んじて受けては居りませうが、さりとて客はまた之に乘じて餘り同情の無い買ひ方をすることは、單に人としても他人に交るべき道ではありません、人に交るには常に其人權を無視してはなりません、夫れ故に商人に對するにも氣に合はざれば小言を云はずとも買はねば其れで事が濟むのであります、次に買物は正當な品を正當な代價で求むることが主眼であつて、決して無暗に安く買ひ得る方法のみを願ふのではありません、と云つてまた商人から罵てられて買ふは最も口惜しい事であります、夫れですから先づ第一に物品に對する眼識を充分に養ひ、商人と趣味を同じくすることが必要であります。

▲禮を失するな　例令は立派な品を見れば相當に褒めても差支へありません、のみならず又物品を買ふ時に餘り面倒をかけた場合は、これに謝すると云ふ念も持たねばなりません、また出入りの商人が若し惡い物を持つて來たとて、只叱り散らすと云ふのみでなく、今後を誡めて注意を與へ、段々に改善さする方法を取る樣にすることが必要であります、此くしますと永い間には決してズルイ事はせず、却て此方の爲めを計る樣になります。

▲誰れの罪ぞや　今日奸商が多いとか、商人には安心が出來ぬとか云ふやうになつて來ましたのも、詮じつむれば其中には社會の罪もあることゝ思ひます、云はゞ買手が商人にズルクするやら、親切氣を出さぬやうさせたの故眞心を以つて商人に對することは、最も上手な買物の方法であります。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

社告

子爵小笠原長生立案　佐藤正校閲　愛國婦人會編纂

奥村五百子詳傳　全一冊

一部金五拾錢　郵税金四錢

本會の主唱者たる奥村五百子女史の傳記は明治昭代に於ける日本婦人の活動的歷史なると同時に一面は愛國婦人會發達の歷史なり今や本會之れが編輯の任に當り材料を精撰し凡そ四百頁大の書冊となし其間に寫眞版を挿み文章を平易にし且つ教育的に編纂し會員は素より汎く全國姉妹に頒たんとす此際會員は率先して購讀方申込れたし

尚本書よりして得たる多少の利益は擧けて奥村氏の紀念碑建設の費用に供したく故に可成多數に購入ありたし

發行並に賣捌所　愛國婦人發行所

愛國婦人會記事

◉評議員會日取　三月分評議員會日取は左の如し

三月廿七日（第四水曜日）午後二時

◉特別徽章贈與　左の人々は特別の功勞あるに付き今回總裁殿下より特別徽章を贈與せられたり

青森支部長　西澤泉子
同顧問　西澤正太郎
埼玉支部長　大久保榮子
同顧問　大久保利武
佐賀支部顧問　香川輝

◉寄附金　其後金拾圓以上寄附金者左の如し

一金參百圓　山形縣　本間光輝
一金百圓　函館　勝田永太郎
一金七拾五圓餘　神奈川縣　倉橋寛子

右之外各々支部基本金又は支部救護金として寄附せられたるもの左の如し

一金五拾圓　群馬縣　住谷幸子
一金五拾圓　同　五十嵐ふき子
一金四十八圓　福岡縣　立花鐵子
一金拾圓　石川縣　男爵夫人大島貞子
一金拾圓　茨城縣　櫟山ます子
一金拾圓　群馬縣　伏島たき子

◉故奥村刀自追弔會　去る七日午後二時淺草東本願寺本堂に於て行はれたる故奥村刀自追弔會は頗る壯嚴に執行せられたり式場は最も質素に裝飾せられ須彌壇の右側一基の卓上に黑布を以て蔽はれたる分骨を安置し其前面及左右に井伊伯爵家寄贈の桃櫻を挿したる生花を供へ本會、婦人法話會京橋區幹事親下谷區幹事日本橋區幹事部其他有志婦人寄贈の菓子を盛り供へ又須彌壇にも柳椿及蓮花を交挿したる大生花を儲き左右に供物を山の如く供へ法燈の光燈々として輝き[illegible]退出樂導師讃經につれ衆僧之に和し伶樂又加はり或は高く或は低く其音朗々として餘音嫋々滿堂の參拜の男女をして自から隨喜渇仰の信念を起さしむるの思あり退出樂につれ導師の退出あるや會長先づ燒香せられついて遺族の燒香を終へ一般の燒香に移りし時を見計ひ小笠原子爵は嗣子勢一氏を紹介し一同に挨拶[illegible]たり一同退出し悉く式を終りしは午後三時二十分なりし當日の來會者は凡そ三百名にして會員以外のもの迄も刀自の德をしたいて來會せるもの多かりき當日席上に於て集りし香典十七圓は永代讀經料として寺に納めたり

東本願寺に於ける奥村刀自追弔會光景

◉奥村刀自へ香典　前々號記載の後ち左の如く香典を送り越されたり

金拾圓　鹿兒島支部
金拾圓　大谷派婦人法話會
金拾圓　本部事務員
金五拾圓　佐賀支部
金拾圓　飯塚伊兵衛
金拾五圓　香川支部
金參拾圓　和歌山支部
金拾五圓　高知支部
金參拾圓　滋賀支部
金拾圓　服部鈴子氏

金拾圓　高山徳三郎氏外九名
金拾六圓　岡崎和助氏外十五名
金拾圓　井伊常子氏外一名
金拾圓　奈良支部
金貳拾五圓　長野金吾氏
金拾圓　曾野金三郎氏
金百圓　山口支部
金拾圓　三井邈子氏
金參拾圓　三重支部
金五拾圓　廣島支部
金拾五圓　愛媛支部
金參拾圓　德島支部
金參拾圓　長崎支部

金拾圓　陸海軍將校婦人會
金拾圓　朴泳孝氏
金拾圓　福島支部
金拾圓　宮崎支部
金拾六圓　松居庄七外十五名

◉吊電追補　奥村刀自逝去の際吊電を送られたる方に宮城の櫻井支部長佐賀の支部長及び香川岡支部顧問め分を脱せり其他にも多少の遺漏の際取しらべ落ちも有るべく「愛國婦人」に記載落ちもあるべきに付申込あり次第補充すべし

各地支部狀況

▲東京支部　本部遊說員野中やち子氏招をうけて北多摩郡幹事部を二月十七日より二月廿五日まで遊說したり又本所區幹事部の催しにて來る廿三四の兩日本郷座に於て慈善演藝會を開催する由

▲大阪支部　本部遊說員高橋まき子同支部遊說中の處本月十七日までにて同支部を濟まし夫れより香川縣に遊說の都合なり

▲京都支部　同會にて去一月御擧行の英照皇太后御十年祭に東宮同妃兩殿下御參拜として同市へ行啓在らせらるゝ際獻上せん爲め製したる帽子は行啓御見合せとなりたるに付其筋と交渉の上支部より東京本部へ回送し此程岩倉會長より妃殿下へ婦人用帽子一個、皇孫殿下御三方へ學生用帽子各一個宛獻上の手續を了りたりと▲同支部の八田主事は岡山支部總會開會準備の要件を帶び去十二日同地に向たり▲同支部帶事業たる癈兵並に軍人遺族授産部に於て製造し居れる學生用帽子は成績頗る良好にして製品も漸次精巧となり二日間に八打乃至十打を製作し得各郡よりの注文陸々あり尚ほ進んで中學校及大學校等の製造をも引受くる筈なりと

▲岡山支部　來る四月下旬を期し後樂園に於て開かるべき愛國婦人會岡山支部總會には閑院宮妃殿下の台臨せらるゝ筈にて御旅館等も既に上之町自由舍を以て充らるゝ事に内定せり

▲廣島支部　賀茂郡幹事部にては過般逝去したりし愛國婦人會主唱者奥村五百子刀自の爲に去ぬる二十八日西條町教善寺に於て追弔法會を營みしが當日教善寺にては六金色の幟を建て愛國婦人會の記名ある提灯を吊し佛前に香を焚き種々の供物をなし最と莊嚴に裝飾を施し賀茂郡幹事部長中尾菊子氏を始め郡長、郡役所員、町村長、愛國婦人會員等無慮百五十名參拜し中尾郡長先づ追弔法會開催し趣旨を陳べ次に僧侶數名の讀經あり參拜者一同燒香の後教善寺住職武田知順師は五百子刀自が同會の爲に盡瘁せし功績を稱へ續て德行寺住職曇山鳳導師の法話あり了りて參拜者一同に對して茶菓の饗應ありたり

▲山口支部　熊毛郡穀木村は由來自治の精神に富み教育衛生勸業及び慈善等總て公共の事業には着々進歩の度を高めつゝあるが今又た本月一日より三日に至る三日間同村字繁王寺光泉坊に於て愛國婦人會の主唱者たる故奥村五百子刀自の爲めに追弔大法會を營み併て其筋の承認を經て會員の總會をも開催したり

▲兵庫支部　來月十八日開かるべき總會準備として本月八日午後二時より山手倶樂部に於て第二回役員會を開き諸般の打合を爲しが總會は總裁宮殿下臺臨の事とて縣下郡部に於ける同會役員の多數來神すべく盛大の設備を要するに付第一回役員に於て既に殿下接伴掛、式事掛、宴會掛、來賓掛、餘興掛、癈兵遺族接待掛、會員接待掛、受付掛、庶務掛、用度掛等の諸掛を設け役員抽籤を以て割當てたる由

▲長野支部　諏訪郡幹事部にては諏訪高田會と合併し來廿四日を期して上諏訪町正願寺に故奥村五百子の追弔會を營む由當日高田會五十餘ケ寺の僧侶（長老小僧迄も）擧つて參會し午前は法要午後は法話ある筈なり來賓並に會員へは齋飯を饗し一般參拜者には菓子を配與する都合なるが右費用は總て會員及有志の寄附金に待つものなりと

愛國婦人會會員並女子人口比較表（明治四十年二月末日現在）

支部名	特別會員	通常會員	計	三十六年末女子人口	女子人口百人ニ付會員比例	贊助員
石川	一、九九四	一九、四八八	二一、四八二	三八五、四七八	五、五七	[illegible]
山口	八四三	二六、〇四一	二六、八八四	五〇六、九二〇	五、三〇	[illegible]
山形	九一二	一八、一九二	一九、一〇四	四五九、六一八	[illegible]	[illegible]
愛知	二、三六二	三一、一〇四	三三、四六六	八六八、五五八	[illegible]	[illegible]
岡山	一、〇二七	一九、九一九	二〇、九四六	五七七、二七二	[illegible]	[illegible]
福岡	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
北海道及函館	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
富山	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
熊本	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
秋田	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
愛媛	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
京都	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
兵庫	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
群馬	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
神奈川	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
島根	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
長崎	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
青森	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
佐賀	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
宮城	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大分	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
香川	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
福井	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
宮崎	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
奈良	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
三重	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
岩手	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
高知	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
德島	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
福島	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
滋賀	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
大阪	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
栃木	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
東京	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
靜岡	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
千葉	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
山梨	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
廣島	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
茨城	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
鹿兒島	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
埼玉	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
和歌山	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
新潟	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
岐阜	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
鳥取	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
長野	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
沖繩	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
海外	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
計	六〇、五三一	五三四、五二三	五九五、〇五四	二五、三一三、〇四〇	二、三五	[illegible]

備考
支部ノ配列ハ會員比例數ノ最モ多キモノヨリ順次配列ス
北海道及函館ノ兩支部會員數ハ合算シテ掲載セリ而シテ函館支部會員數特別四百九十七人通常千六百四十二人ニシテ他ハ北海道支部會員數ナリ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

子供くらぶ

象の仇討

江戸　靜川

印度デッカン地方ハイデラバットと云ふ所の、ナイザムと云ふ土王が虎狩をする時に使ふ象が五百頭ばかりあります、この澤山の象はフィルハーナと云ッて、一定の場所に飼ッてありまして、それにはまた澤山の人をつけて、番をさせたり食物を拵へて與へる役などをさせてあります、所がこの飼主のなかに一人質の善くないのがありまして、自分が受持ッて居る一頭の象に、朝と晩とに特別に四個宛與へることになッて居るパンを二個宛しか與へない、さうして

「ナーニ半分ぐらゐ誤魔化したッて、對手が獸だ、氣着くこともなけりや怒ッて文句も云やしない。」

と高を括ッて象のパンを毎日半分宛盜んで居りました、すると此象が怒り出した

「何んだ失敬なことをする、他の連中は每朝每晩四個宛パンを貰ッて居るのに、俺にばかり不公平なことをする、已れ見て居れ、人間と獸で言葉が通じないから喧嘩は出來ないが、今に敵をとッて遣るぞ。」

と力味返ッて、今日は敵を討たうか、明日は暴ばれて驚かして遣らうかと待ッて居りました。

所が象にそんな謀計のあらうとは、神ならぬ身の御存知ない飼主は、或朝例に依ッて四個のうち二個を自分の臺所へ隱して置いて、二個だけ持ッて行ッて象に與へると、象は嬉しさうに食べる眞似をなし、二個のパンをお腹へ入れず口の中へ仕納ッて置いて、續いて持ッて來た水を飲む振をして、突然飼主の腰から腹を捲いて力任せに投げ出しました、アノ强い虎でさへ、一撲ちで殺されると云ふ、恐しい力のある鼻で捲いて

「己れ思ひ知ッたか。」

と投げ出されたのですもの、何かは以て堪まるべき、飼主は惡戯兒に石の上へ投げつけられた蛙のやうに、平たくなッて其儘息が絶えて了ひました。

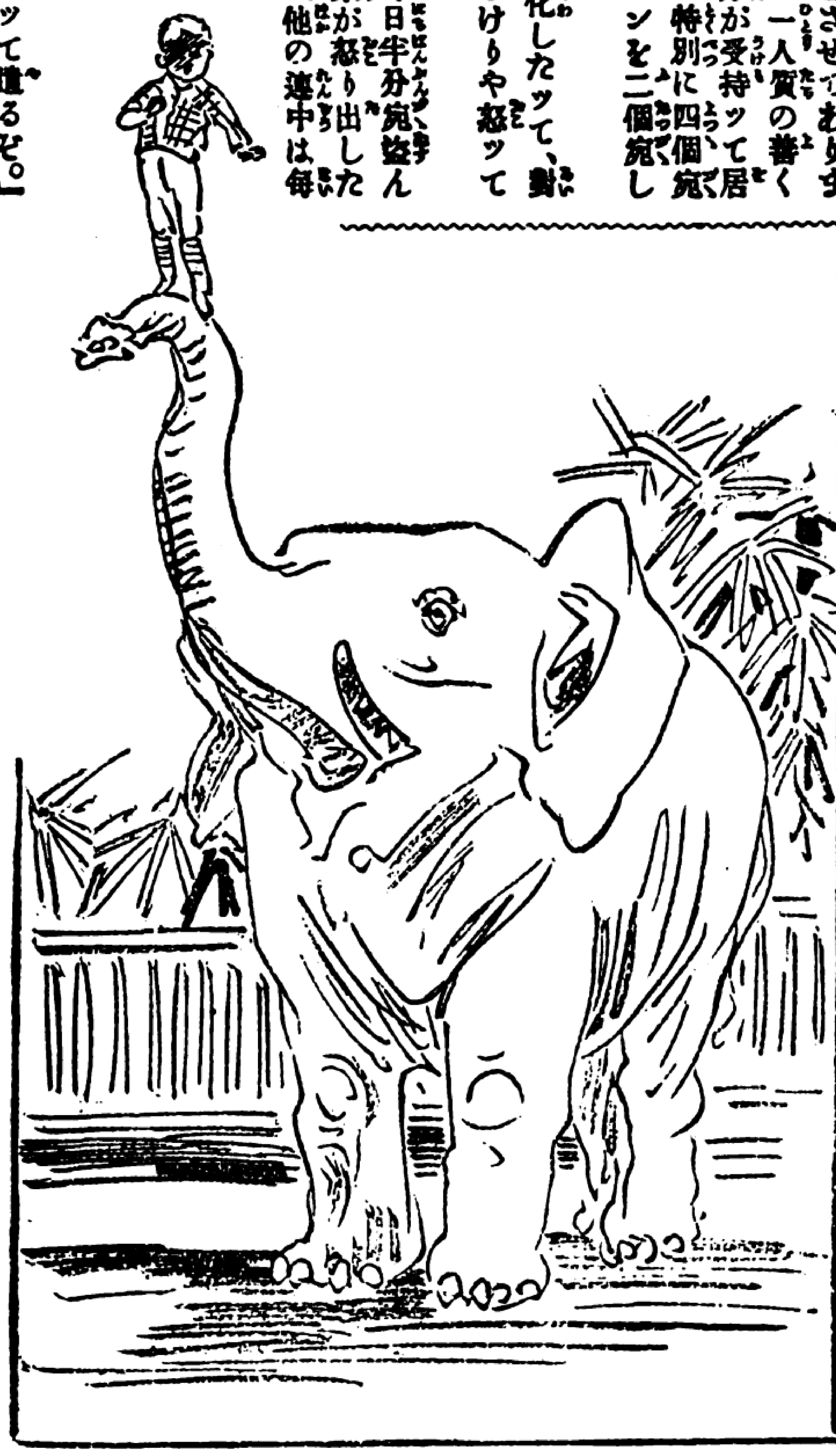
さア斯うなると大變です、飼主が象に殺された、アノ象は氣が狂ッたのではないか、氣が狂ッたものとすれば、あの儘にして置ては危險だと云ふので、數十人の象使が、手に〳〵棍棒を提げて來て、象を懲らさうとしますと、象は平氣なもの、俺に仇をする奴を俺が殺したに何に不思議があると云ッた調子で、口の中へ仕納ッて置いた最前の二個のパンを、ソッと口から出して其處へ列べて見せました。其處で今にも打ッて蒐からうとした象使も、聊か不審の首を傾けて

「ヤア、是れは妙だ、不思議だ、パンを二個口から出したのには何にか仔細があらう、夫れに落着きかへッて居る所を見ると、氣が狂ッたのではなさそうだ。」

と、一端振り上げた棒を卸して、恐る恐る傍へ寄ッて見ますと、象の氣の狂つた時には、必然兩方の顳顬の邊りから一種の脂膏が汗のやうに出るものですが、其の脂膏がちッとも出て居らないのみか、誰に害を加へやうともしませぬので、何うしたことかと不思議がッて居る所へ、殺された飼主の母親や、內儀や、息子が息急き遣ッて來て

「何うぞ皆さん、お願ひで御座います、早く敵を取ッて下さい。」

と聲を上げて泣き出しました。



雖然、この象は土王の所有物であるから、氣の狂ッて居ないものを殺す譯には行かず、と云ッて現在其所に飼主が殺されて居るのを見ては、此儘に捨てゝも置けず、夥多の象使も其の始末に困ッて居りますと、象はブラ〳〵鼻を振ッて居りましたが、唐突に泣いて居る飼主の子をまた鼻で捲きました。

「ヤア、また子供を捲いたぞ、モウ氣が狂ッて居らうと、居るまいと、什麼事を云ッては居られぬ、さア打て、打てッ。」

と云ふので、象使が一時に棍棒を振り上げる、其の間も待たず象はクルリと鼻を曲げて、捲いた其の子を頭の上に載せ

「オイ〳〵何を騷ぐんだ、言葉が通じないから誠に不便で困るが、この子には罪がない、罪のない子を害めるやうな、そんな沒義道俺ではないぞ。」

と云ッたやうな體をして見せましたので、象使はまた振り上げた棍棒を卸し、役人共々いろ〳〵詮議をして見ました結果、飼主が象に與ふべき四個のパンの半分を、長らくの間盜んで居たことが知れましたので、象の罪は赦して遣り、それからこの象の飼主は、改めて其子にさすやうにとの土王からの御沙汰があッて、今に其子が飼主になッて居りますが、父親と違ッて正直で、大變に象と間が宜いとのことであります。（をはり）

——印度駐英大尉シャンカー、ラウ氏談——

育兒のしをり（上編）

ドクトル メヂチーネ　長井岩雄

第二　小兒食物の事

（甲）乳兒の營養

人若し小兒養育に付き尤も大切なるものを問はゞ、食物即ち營養なりと答へんとす、さて天地間ありとあらゆる營養物の內、乳兒の食物としては言ふまでもなく母乳に勝るものなし。

抑婦人妊娠すれば其乳房に變常を來し、月數重なるに從ひ次第に發育し、月滿て分娩するときは、乳汁分泌して其子を養育し得ることは、實に天授の恩惠にして、吾人が稟けたる無限の幸福とや云はまし、されば分娩後母の乳を以て其子を哺育するはまた自然の道として、若し授乳せしめざるときは、自然に背くものと云ふべし。

さて乳兒の食物は、第一滋養分に富み、第二消化し易く、第三其滋養分始終變化なく、第四新鮮にして、第五不絶供給せられざる可らず、此目的に適ふものもまた母乳を措きて他に索むべきなし、されば毎日、毎週、毎月、其子に適當する食物を母の乳房より分泌して、其子の營養に過不及なからしむるは、實に自然の妙要にして、造物主の注意周到と云ふべし、兒は此天授の良食を得て始めて無事健全に成長することは、人類創生の初めより今日に至るまで、幾百千年經驗せられたる事實にして、何人も疑無きことなり、之を名けて天然營養と云ふ、されば母乳は乳兒を營養する爲めに分泌するものにして、若し授乳せしめざるときはその乳は天地間實に不用の贅物と云はまし、さは云へ母に慈愛哺育の心なければ、兒は此幸福を享くるの途なく、實に母の恩は無量にして、そも〳〵分娩の時より長き月日の間晝夜哺育撫養の心つくしは、何にたとへんものなし、さればにや子はその恩愛の露をうけてすこやかに育ち、親子の情も愛に濃やかとなりて、成長の後も母を慕ひ、その愛戀の情延ては一家繁榮の基ともなるものぞかし。

たらちねのはゝその露のかゝらすは
咲きいてましやなてしこの花

萬一母大患に罹り、または母の身體に異常ありて乳汁分泌せざるときは、乳母を求むべし、若しまた乳母を得がたきときは、止を得ず人乳に代るべき他の營養品を索めざる可らず、之を名けて人工營養と云ふ、此場合人乳に代用し、尤も適當なるものは牛乳を第一とす、如何となれば牛乳は尤も其成分人乳に近く、又日常得ること尤も容易なればなり、若しまた牛乳を得がたきときは、煉乳、乳粉（小兒粉）其他種々なる營養品あれども、皆遠く牛乳に及ばず。

さて牛乳を以て小兒を營養せんには、第一牛乳の良否に注意し、第二新鮮にして、第三稀釋法、第四分量及用法、第五防腐清潔に注意せざる可らず。

▲子守唄▼

各地子守唄の投稿を望み申し候

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

愛國文壇

愛情の尊嚴（中）

ヂエーン、エイアの梗概

片山天弦

ジエーンは美人では無かつた、ロチエスターは醜男子であつた、然し戀する眼には醜美何の關する所ぞ、清き愛の心は凡てを淨化する。互ひの心を明したのは長閑な夏の夕、音なく散つて聲なく舞ふ花の園で、黄金滴る沒日を樹の間がくれに浴びながら、密の樣な對話に日は暮れて、靜閑の夜の幕が庭を包んだ時の事である。二人の心は情に躍つて掻抱いた胸と胸には勵機の波が傳うた。一對の不幸見は合して最も幸福なものとなつた。彼等は夫婦たらん事を神に契つた、けれども幸福は夢の樣に過ぎて、後には一層の悲慘が來る。

二人の愛は二人の外、誰も知らなかつたが、此の家の離れに一人の狂婦が居つた。そして此の家のありし以前、彼れが客を請待した時、メーゾンなる旅人が突然訪れ來て其の夜は此所に泊つた。夜半過ぐる頃彼れは獨り狂婦の室に入り、甚だしい怪我を受けたので、ロチエスターは夜の中に此者に金を與へて遠國で治療する樣にさせたが、知るものとてはジエーンばかり、それも果してその女は狂婦であるか、又如何なる關係があるのか、メーゾンが何人であるかに就ては知る事が出來なかつた。

其の後數日を經て愈々結婚の當日となつたが、ジエーンの申出で式は極めて質朴に牧師と當人の四人丈けで行はれて、纏て終結しやうとする時、突然一人の代言人が現はれ、メーゾンが現はれて、かの狂女はメーゾンの妹でロチエスターの十五年前結婚した妻で、まだ離婚もせぬものと解つた。

ロチエスターは斯ある事を秘して居たのだ。彼れは强慾の父に强ひられて狂女と識らずに結婚して、其の後の十五年間は暴れ狂ふ猛獸の樣な女を妻として居た。て家庭の温味を知らず、怏々として孤獨、寂寞にその日を送つて來た、彼にはジエーンの温和な性情を見るに及んで、戀戀の情燃ゆるを禁じられなかつた。彼れは終生をジエーンと共に樂まうとした。然しジエーンは今何うであらう、彼の隱して居つたのを責むるより、一時の情慾に眼が昏んだ己が薄志を顧れば、後悔の念は胸を刺して、所詮添ふ可くもあらぬ戀人と同居して、追懐の涙に日を送るは彼女の忍び得る所でない。されど今生命と思ふ戀を捨て、何程に溜く一切の希望を暗中に葬り去つて、何處如何なる所に行くとも定まらず、再び知る人も無い世の流れに浮ぶは、底知れぬ沼に沈んで立つ瀨もあらぬに似て居らう。

窓打つ時雨や、林を搖がす小夜嵐を聞きながら、獨り己が部屋に果敢無い離流の跡を辿つた彼女の心地は死ぬが如く、涙は瀧津瀨とはふり落ちた。斯かる時こそ尚更に戀人の床しく偲ばれて、彼れの腕に身を投げ、心のたけを泣き盡し度く思ふ心は切であつた。

然し意志は遂に感情を征服して、その夜狂氣の如く打ち騷ぎ、百千度哀情を叫び止まる事を願ふたロチエスターの言は聽かず、數斗の熱血を絞り出さるゝ思ひを耐えて、鷄も鳴かぬ曉の、誰知らぬ間に飄然と家を出た。

向ふ所は定めない捨小舟の、前方も見ず後方も顧みず、夏の曙の露に濡れつゝ、妻呼ぶ小鳥にも心引かれ、見る人も無い野に泣き暮れたが、斯くてある可きで無いから、財布を空にして通り掛りの馬車に搭じ、今は徒なるロチエスターを遠ざからうとて、何所ともなく乘つて行つた。

涙の中に二日は過ぎて彼女は人家稀な街道の巷に降された。懷中には一文とて無く、小荷物は馬車に置き忘れ、人里遠い此所では何と詮術も盡き果てゝ、右顧左顧唯茫然とする許りであつた。あはれ今は彼女には一の會と繋ぐさゝかの糸程の身寄も無く、唯なべての人の慈母「自然」あるばかり、苔蒸す幽の片ほとり、草の繁みに疲れ果てた空腹の身を投げて、淡蒼一色の空を仰いだ時、涙さへ今は彼女を慰めなかつた。

その夜一夜は艸を褥に、またゝく星を眺め明し、又の日は空腹を耐え忍んで淋しい道をとぼ〳〵と辿つた。正午過ぐる頃ほひ、とある村落に着いたので、喰ふものもあらばやとは思ふたけれど、一錢の金も持たず、さて傭はるゝ所もなし、飢餓の本能は針のやうに突いて來ても、それを露するよすがも無く、又も野原へと彷徨ひ出づる時、不圖教會を見付けた、が其所には牧師も居らず、食を求めては身形の美くしいのに反つて疑を懷かれて拒まれた。

次の夜は寒く雨さへ降り出すに宿る所も無く、此の世の苦痛の極致をあつめて、失望の身の疲れた足を曳き摺り〳〵、果ては丘の上に行き倒れた。嵐は森を搖り雨を卷いて、遙か彼方に呻いて行く。寒氣に立つた彼女は遠き瀨邊に消え相な燈火を見て、倒れては起き、起きては倒れ、辛ふじて其處に着いて戸を叩けば、老婢が出て來たが强盜の手先と思うて直ぐに戸を閉めて了つた。

最後の一縷の希望も絶え果てた今は、溺るゝ人のこれのみが命の親の浮木を奪はれた樣に、張り切つた氣も弛んで倒れ伏したが、其時恰も歸つて來た主人に救ひ入れられた。

短文

題「櫻花」

▲花の雪（二等）鎌倉　中隈富士子

曙の空静かにさし昇る朝日の光まばゆく、咲きつゞく花の白雪ほの〴〵と薄紅に匂ひたるは更にも云はず、春雨の雲間をもるゝ月影に、萬朶の花露を帶びつゝ、朧ろげにうち霞みたる殊にをかし、世の中は三日見ぬ間に櫻哉とやらん云ひたるも、さばかりはと起き出でゝまづ眺めたる庭の面は白ふ、時ならぬ花の雪に埋もれたり、哀れ華やかに咲き匂ふてあこがるゝ暇もなく散るぞ櫻の心なる哉。

▲選者曰　花よりも美しき文

▲花の蕾（三等）鳥取　内海清子

池の汀の青柳ゆらぐともなき春風に、ふたひらみひら散り行く、櫻の花、いと長閑き庭の面をなつかしみて、立ち出づる折しも、隣よりもるゝつま琴の音は、梅子の君の手すさびか、名もさくらつくしの一曲、偕も床しや、いでゝ君がりとはまし、今散りし花の一ひらつとにして。

▲選者曰　着想面白ければ

▲花、花（三等）京都　古川よね子

美はしきかな花、花はさくらなりけりな、八重もよく枝垂れたるもよけれども、山櫻こそ品よく美はしけれ、科戸の風に横雲晴れてさしのぼる朝彥は赤き葉にてりそい、花ににほひし山櫻こそかぎりもなく美はしけれ、雨はれ露おきて美はしきは八重櫻とこそ。

▲選者曰　少しく物足らぬ心地はすれど

▲心の花　福島　横川千賀子

虚空を彩る萬朶の櫻、霞の隙より笑める姿のいみじきに、徐ろ木陰を彷徨ば、花の呼吸に身も醉ふらん、花のふゞきは露よりきよく、人の怒りもかゝれとこそ。

▲花の顔　福岡　松村壽賀子

遠に聯く薄桃色の一筋こそ阿部山の櫻なめれと、心もとみにあこがれて、漸く至りぬ、右左の櫻の枝さしかはして咲き匂ふ樣、宛然花のトンネルとやいはまし。抔語りあひつゝ見もて行く程に、「櫻花不可折」と筆太に記されたれば、せめてはとて一輪を髮にかざしぬ、後なる友のいかで己もと手をましのぶる折しも、花守の來るに、そと袂ひかゆれば、顏赤らめて驚き樣のをかしともをかしかりしよ。

▲花か蝶か　熊本　藤なみ子

春風のどけきに、椽端近う陶然として、木の芽田樂に舌鼓打ちつゝけふ眞盛りの八重櫻ながめての夕げの樂しさは、ことし四つのみち子にも餘程うれしかりしと見へ、かあさんあすも明後日も、毎日〳〵椽端でお花見しましよふネー。あはれ櫻のいつまで花にてあるとも知らぬ稚兒が、お下髮のリボンに一ひら二ひら蝶とまがひつ。

▲花の姉妹　京都　松岡りよ子

東山は滿目たゞ錦？とはかりのえもいはれぬけしき「姉樣あの山の美しいてすこと、まるで雪のやうれ、あれ皆櫻てせうか」「エ、そうてす、昨夜雨がふりましたれ、それて皆つぼみてあつたのもみな開いたてせうよ」「そう私一度見にゆきたいわ、姉樣いつかつれてつて頂戴な」「アア、今日何曜？」「ア、けふ土曜てすよ、あしたつれてつて頂戴な」「エ、それてはもうこの着物もすぐてきますから、お母樣にそういつてあしたときめておきませう」「アラ、これあたしの、嬉しいこと」と山の方から目をはなした妹は「こゝに櫻の花が」と花のやうなゑまひ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

國秀六佳選の内

櫻の宮

宮永才子

常は淋しい櫻の宮も、けふは觀櫻の舞臺となつて、なか〳〵賑はしい、祠の横から堤一面、菜種花咲く後方の畑に至るまて、あまたの掛茶屋が設けられて、そこにもこゝにも花見の客が充て居る、洋裝の紳士もあれば、花簪かしい佳人もある、海老茶袴の學生あれば、お下のリボン華やかな令孃もある、アッ、花が散つた、可愛い坊ッチャンの海軍服に。

こなたに小さな瓢を前にして、靜に遠山菜甫の景を眺め給ふ老人あれば、あなたにはまた何やらん、聲高らかにうたひつゝ、ひとり興ずるうかれをもある、素より紫雲たなびく三十六峯や、濟列玉の如き大堰川を控へた嵐峽の勝には及ばない、されど春なり、平和なり、紅塵にまみれつゝもなほかつ花をめづる幾多の都人士は、こゝに相集ふて、おのおのその歡樂をほしいまゝにするのである。

ながむれば空の長閑なることよ、白く黑くたちのぼる烟筒のけむりは、おもしろく飛ぶ鳥の影をかすめて、袂をはらふ風だにもなき淀川の橋上は、人を以て一寸の餘地もない、あゝ往さ來るさ幾千の老若男女、これがみな以前のやうに渡し舟によるものならば、どんなに混雜することであらう、日影うらゝかな南方には、薄衣につゝまれたやうな大坂城が見える、紅霞たなびく西岸には、造幣局と畏くも、かつて今上陛下の行幸を迎へまつりし泉布觀とが並んでをる、造幣局沿岸の櫻は、櫻の宮のよりもさらに〳〵美はしう咲き誇つて、そぞろに、深緑をたゝへたる淀の流も匂ふばかり、みかへる東方に連るのは、なにがしくれがしの別莊、風雅に構へたる是等の邸内に住む人は、たゞに賑はしい晝間の光景のみならず、朝暾華やかに匂ふあしたの景色、春月おぼろにかすむ夕の花など、思ひの儘に眺めらるゝとであらう、北方の鐵橋には、城東線の汽車がはしる、下流網島の停留所からは、巡航船がはや歸りの客を滿載して下つて行く、すれちがひに上つて來た、土砂や石炭をつみ込んだ船も、みなこれ一幅自然が寫した入神の繪ではあるまいか。

あゝ賑はしい櫻の宮、あゝ美はしい造幣局、澱江兩岸の花は、こゝに相まつて浪花の春をかざつて居る。

東墨堤の花と取交はすべき約ある東の友に贈るべく、一片の花を白紙に包むで、色な褪せぞ香な失すると懐中に、名殘惜しくも歸路につけば、入相告ぐる大長寺の梵鐘、ゆるく響いて風なきに散る花兩三片、ア、其處には一代の文豪巣林子が靈筆に、今も唄はる小春治兵衛の奥津城がある、花美はしけれど俗を離れぬ櫻の宮に隣りて、瑩域美ならされども常に詩的感想を喚起さしめるこの古刹ある、是れまた花の如ら絕好の對照！

國秀六佳選の内

祇園の夜櫻

花輪余志野

三十あまり六つの峯よりみねつゞきたなびく春霞、さながら薄絹かけたらむやうに、いとゞのどけき夕まぐれ、あかぬ景色に窓の枝折戸とぢやらで、ながむる袖に夕風の花の匂ひを送りきて、えもいひしらぬ折も折、かなたの山の端とみに色づくよと見るうちに、一輪の月は松のひまよりほのめきそめぬ、げに今宵はもちの夜なりけらし、いざとて家人をうながし、宿をいづれば、心はおなじ都人、はや西より北よりはた南より、東の園を指して問來る人のさはなる、祇園の社の邊り見渡せば、今を盛りの一本櫻見はやさんとて、つどひきしは老若男女のきらひなく、貴賤貧富のへだてなく、たゞうるはしき笑みをたゝべて、人々を迎へがほなる花の色、ふくめるは紅ゐ、咲るは白く、よそほひこらしゝあて人にもたとふべき、幾すじとなく咲つゞく細き枝はしなやかに地にたれて、幾百歳をへたりてふふとき幹をばおほひたり、げに外國まて名をしられたるひともと櫻こそ此園のあるじなれ、あはれ春毎に幾百萬ともしれぬ人を、こゝにあつむる花のほまれこそげにめでたけれ、見あぐれば朧夜の月は心ありげに花の梢にかゝれど、たきしきるかゞり火にさへられて、人の目にとまるはまれならん、櫻樹のもとすこしへだてゝたて連らねたる掛茶屋あり、花見る人の袂をひきて、こなたに入りていこひてよと、かしましくよぶ聲もいと厭はしく、園の板床は人をもてみたされ、かたはらの芝生には、己がじゝひさぎし瓢の酒くみかはすなど、樂しげに笑ひどよめく群あまたありて、こもまた花によへるになん、のみつかたりつ立さはぐもおかし、かく宵の間のさはがしさにかへて、小夜ふく風の身にしみそむるとともに、かゝる人の散りはてゝいとしづまりての後こそ、花はこよなうめでたけれ、靜かにねむりたらむがごとき山のすがた、幽靜なる月と花とのおもむき得もいはれず、ふけゆくまゝにかゞり火漸くきへがてに、かたむきそめし三五の月は、しづかに雲のひまもりて、あかぬ袂をとゞめかほなる。見ても〳〵あかぬ都の糸櫻、いざやこよひも夢に結ばむ。

國秀六佳選の内

花の運命

水野淑子

梢眺めて待ち玉ひしお庭の櫻漸く滿開の此頃となつて、奥樣は輕からぬ御病、何といふ殘念なとであらう、拙きながら一枝いけてお枕近う御覽に入れしに、莞爾と笑み玉ひし御目の中何となく潤み玉ふも悲し、噫、去年はお庭の芝生に遺族の方々を集めて、御親ら何くれとの御饗應に、心ゆく花見してけるよとお喜びなされしを、今年はお花所か、雨にも風にも奥樣の御身が氣遣はしい。

葉煙草製造女工

葉煙草專賣局技師農學士　加藤末郎

葉煙草專賣局に於て全國を通じて使用して居る職工は一萬八千人程でありますが、其中八分は女子を使用して居ります、女子は男子よりもはるか緻密てあつて器械的の業務には餘程通じて居り、且つ賃金も安くて濟みますから、最も多く女子を使用して居るのでありますが、其職業としては先づ葉煙草なればこれを詰める役、並に紙の眞を入れる役等夫々分業になつて居ります、又葉煙草の方は葉を一々揃へてこれを刻むまでに調へ、男子の力に依つてこれを斷つまでにする業務でありまして、十三歳以上の婦人なれば多くの知識を要せず四五日の練習て其業務が執れる事となつて居ります、工賃は仕上げ高に依つて支給する事となし、愈々熟練すれば一日の日當が一圓位までになりますが、それは百人に一人の割合で、平均は三十錢位ゐてあります、昔し商賈人の手で製造して居た時は、工塲に秩序がなく、歌を唄つたり乳呑兒が傍らに居て泣いたり、休みたい時には勝手に休み、働くものは夜業までなし、幼少なるものまでも勞働に服して、只利益一點で使用して居つたのでありますが、官業に移つては大に秩序を付けまして、勞働時間は十時間と定め、其間に三十分間三度の休憩時間を置き、其他工場の如きも衛生上に注意し、不潔のないやうに致し、職工には年々四回づゝの賞與を行ふて其勞を慰め、其他事業の爲に負傷したるものは則ち公務の爲に負傷したるものとして取扱ひ、恩給及び貯金の制度を立てる等頗る周到なる注意を施して居ります結果、今日では女工取締として工長なるものには高等女學校卒業生等も這入つて來ますが、多くは未婚の婦人で、十六七歳位のものが多く參ります、是れを採用するには別に試驗等もなく、期間にも限りを付けず、絕へず募集して居りますが、全國各地とも職工が不足する程であります、又紡績事業等の如く寄宿舍を建てゝこれに收容して業務を執らすほどの必要なく、各々自宅から通ふて居りますので、會社などの職工にくらべると餘程寛大な處があります、高等の學問ある人は監督の任務を與へて今日では工長と云ふ名義になつて居りますが、追々には女子判任官等の制度に移るてあらうと信じます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

大口鯛二氏選　櫻

天　群馬　伏島たき子

ことのはの友すみませりこの春は都をとはん花見かてらに

▲評　櫻咲く春はさてこそうれしけれ遠方人も來むといふなり

地　大阪　佐野眞子

今しはしまちてすみたの花見せむ都にきつる土産はなしに

▲評　博覽會を觀て花を看ざるはげに佛造りて魂入れぬ心地なんすべき

人　愛知　湯淺とよ子

たちかへり花見の衣ひもとけは櫻一ひらちる袂かな

▲評　類想絶無とはいひがたけれど選外におくべき歌にはあらじ

○佳調甲

あかすしてふりかへり見ろわか袖に二ひら三ひら散しろ櫻かな　石川　廣野すて子

けしにやかろ舞の手ふりもみゆるかな櫻にてふ　埼玉　水野淑子

宿かりてかとのやうへやかへらむ櫻花かり　兵庫　岡井嵐子

咲き匂ふ山邊に見てやかへらむ櫻花かりみし　東京　安藤信子

きゝたる山路にうかれておほろ花を行とし　東京　森空に遊ひく

なかき春の袂に花こゝろもおほ空にまうてゝ宮しは愁子

久方の袂のとゝる下道上野の花盛こころも空に遊ひく　埼玉　調宮忍子

らしつる母をたすけて宮まうて　静岡　青水花子

病いえし母をたすけて宮まうてしは愁子

散りかかたくの山さくら月をわけいれは花　靜岡　青水絹子

ん花さく節に山さくら月をわけいれは花の吹

さくら咲くよしのゝ春はみな人の心の花も色やそふらん　群馬　木暮千代子

櫻花あかぬなかめにくれぬれは梢に匂ふ月そまたるゝ　徳島　宮崎つる子

山櫻さきの盛の夕はえに春の霞も立ちまよふらん　山形　三用ゐい子

窓近き一本櫻花さきぬおなし心に友ゑのふ　大阪　大串くに枝

たくふへき色こそなけれ數島のやまと島根の山櫻花　甲府　風間千代子

日かけさすはしに糸くるおうな見えて花さかりなり山の一家　京都　渡邊豐子

朝またき廢亂髪なかきあけてかさしにけり花の一枝　靑森　大橋入佐い

君來ませあたりいふせき我か庵も今そ櫻の盛なりける　靑森　清水花子

里人か唄もかすみて聞ゆなり櫻花ちる山崎の夕暮　岩手　花卷たき子

春の道皆こゝにあるかと見ゆるまて山庭の櫻は　三重　南部操子

さかりなりけりあまたの花にくれぬと山寺の鐘に散り行　靜岡　六川ちう子

今日もまたのひ櫻花見に行く人のなかにめりやすにも　靑森　大橋しや

一枝は瓶にさゝんと庭櫻をしみなから手折りつる哉　長野　日渡米子

折りつる嵐山御室平野の花とひてなかめし春　京都　渡邊しり

ろかな　愛知　市橋幾子

ていとまある大宮人もいとまなき見る櫻かな

○乙

春かすみたなひく雲の絶間よりほのかに匂ふ山さくら花　東京　渡邊仙子

梓弓はるの光に我庵のさくらも今や咲き初にける　東京　中山きわ子

山のはのうす紅は夕月の光しめたる櫻なりけり　橫濱　大橋貞子

きのふまてつほみと見しも今日よりはさかりを見する八重櫻かな　靑森　千葉千代子

ちりまたゆくる人の袂もかなるまてにほひみちたる花さかり　大阪　今井糸子

佐保姫が春の手染の糸さくら尾上に今やしきりちらん　神戶　宇野類子

しき嶋の大和心に似たる山さくら花の王とはいつ　山梨　小尾玉代子

武夫の心にも似て野邊の櫻の八重一重いさなりて見む　東京　安東ちせ子

かなりけむ

霞立つ野邊の櫻の八重一重

花の一枝　東京　安東ちせ子

野にも山に匂ふ櫻は佐保姫のこゝろな人にみ　兵庫　中村絲子

すゝろなる雲かと霞かとまかふまてよしのゝ櫻花　岡山　森島古野

白妙にけりきかぬほとをあはれの櫻かなわた

咲きさかぬにけりをあはれの櫻かな

山の風こゝろせよ　東京　竹村ちぬ

ゐる風さそふな山櫻花　東京　竹村ちぬ

▲評　山二つあり一つは舍か山の櫻、よし野の山は雪かと見るまでに千もとの櫻花咲きにけり　愛知　下郷すゑの

櫻こや今日はなしの山はみよしの　京都　小野寺ち花を折

春ならむ心はかりは庭の櫻は花咲きて樂しむ今日のとせ　北海道　香山壽和の子

手植ぬかなし庭の櫻花咲き　名古屋　梅村八代子

の主かせいほのやれ窓あけて見つろかな山井の花

ふけ山のかやれ窓あけ　愛知　名取し花子

とせきいほの山櫻花のやれ窓あけて見つろかなくの

數島の大和心をうたひに君こそしのへ子

み吹く風毎にもさまる御代は櫻花こゝろの照

に咲きにほふかな　函館　龍岡とし子

あやに匂ふかな降る春雨に風そひて心おかとしるか

花の上に思ふ心をしろかもの　愛知　松宮の錦か

君なる思ふ心をしろかものふ　京都　下鄉の梅子

花ちるもとかれて思へとも　長崎　葛原玉散り子

散るちらぬ心とかれて思へと櫻花今朝の嵐に　愛知　木俣ゆき子

くさくらの櫻なかめても思ふかな　京都　宮居まめて六女子

咲きほこるこんのみしたしも　京都　さくら松の春に子

行く花すくさのみるはたのしき中にも　京都　池田美登子

な花そわかさきのかけにも愛知　宮居の花　愛知　大串千代子

花のそわき階のて櫻咲きにけ　京都　宮居まめ

九重の御階の櫻咲きにけむ　京都　さくらの春に子

ろ花の御のてけのしき中にも思ふ　大阪　大串千代子

このめけりなるらん一夜なてあすは散らむ　京都　池田美登子

ものゝふのこゝろに似たる櫻花　大阪　大串千代枝

國のひかり大井の里にならむ一夜　京都　池田美登子

櫻さくひかれ井の一夜　長野　高橋代子

花さくたれ木曾路の峰の櫻花　長野　高橋代子

ましらふれ木曾路の峰の　長野　高橋代子

色とこそ見されしなからふる雨にぬれても匂ふ山櫻花　鎌倉　中限富士子

朝日影かつ見されしなから　鎌倉　中限富士子

ふ山櫻花

第十五一歌作募集

題　靑葉

選者　大口鯛二氏

規定　一人一首用紙綸葉書

優等の作歌は四月廿日發行の本紙上にて披露すべし

第十四二文短募集

題　随意

選者　編輯局同人

規定　振仮名附用紙葉書

優等の作は四月廿日發行の本紙上にて披露すべし

第二十回俳句募集

題　靑葉

選者　編輯局同人

規定　一人一句用紙綸葉書

優等の句は四月廿日發行の本紙上にて披露すべし

第九廿回新詩募集

題　随意

選者　編輯局同人

規定　短きもの用紙葉書

優等の作は四月廿日發行の本紙上にて披露すべし

締切四月五日限り

ひろかへす蝶の羽風ものとかなり匂ふ櫻の花の下陸　鳥取　内海清子

花のもちる御社の軒におほろの春の夜　秋田　西村智賀子

靜月下櫻花ちる御社の軒に　秋田　西村智賀子

の月夜吉野のさくら咲きそめて何か語る子

薄師と歌人見むとて集ひくる　甲府　石原けいは子

美しき櫻見むとて集ひくる人にも花の色は　新潟　靑木美家子

鶯けりのさそはすもかな山さくら霞のおく　茨城　綿引響子

見え風ゆかしさそはすもかな　茨城　綿引響子

吹く風のさそはすもかな山さくら霞のおく

に匂ふめくみの露に咲きそめて今をさかり　靑森　佐藤國子

大君のめくみの露に咲きそめて今をさかり

の山櫻かな

さしい山櫻の光もおほろけに匂ふや花の

ささかりなるらん月の光もおほろけに　靑森　笹田正野

宿りたかくも美しきかなさくら花春の　京都　松岡みよ子

今朝見れは庭のさくらもほころひぬ　大阪　富永よし子

初瀬はいかにあるらん　大阪　富永よし子

ますらをか朽ちしかはれの其上にはかなく　福島　中村まさ子

數島の大和の人の眞心を千代にさかせん　靑森　三上秋子

ちりし櫻花かな

櫻花武士の心を花に匂はせて咲まさりたる　兵庫　下岡山櫻

かな

日毎見れともあかぬ櫻　橫濱　鈴木まさ

るあろしなりけれそ外水につゝ

數島の大和心をそのまゝに咲かせて匂ふ　函館　内山郁子

櫻花

岩にゆるなみの花とも見ゆるかない山さ

くら風にみたれて　大阪　大谷たか子

水の面に已が姿をうつし見て一入はゝふむ

山さくら散　東京　荒尾みつ子

年毎にあたにさきつゝ花問ふ人もなき山

の奥かな　福島　中村千代子

朝またき掃き清めたる庭の面に櫻花散る

つ三つよつ　青森　留目うた子

さきにほふさくらのみかは潔くちるそめ

てた　山口　米田竹子

咲き匂ふ花の雲間にあくかれて心もそら

になりにけり　山口　米田貞節子

妹か手植の櫻見ませとて贈る給はかきな

かしき花の　岡山　山崎露子

隅田川花のさゝなみこきわけてあそふ小舟

も面白き哉　長岡　阿部秀子

高とのゝ琴の音ひくゝ春の夜のおほろ

と花をかすめるゝ　岡山　武田須磨子

一枝はそかへ匂ひくれとも　大阪　花ならすとも

風のさそはめにも散らさしかたる花の　大阪　大谷つま子

山の井にさへさしかゝりたる櫻花水くむ每に　櫻花　大谷つま子

ふきゝ見る散しかれし櫻花　福岡　松村露賀子

梓弓春のこゝろをひくも　靜岡　野山に匂ふさ

くらなりけり　靜岡　竹内幸子

し山櫻花のけしきを添へてけり今日咲きそ

め　靜岡　彦消清子

日本の色とも見るべきは今咲き匂ふ　長崎　葛原梅香

山櫻はな

遠近の山は櫻のさかりにて昨日も今日も

に暮れけり　長崎　林田鹿子

花

あこかれてたとるともなくうかれ出つ森　福島　緒方よし

さくらふすなの人もめつてふ櫻花千代まで咲きの

外國の人も　島根　白井政子

匂へかしいつ羽風にも心おかれ　京都　古川よね子

村とりのかなかつらに　埼玉　小宮ゆめ子

さかりかやみし隅田の川つらに　埼玉　小宮ゆめ子

船くらへやみし　靑森　鈴木きく子

ろく櫻散るなり

中垣のへたてあれともとなりよりかをり來　靑森　鈴木きく子

にけり花さかりかも

春雨に庭の櫻の紐ときて匂ふもうれし　靑森　大酒またの子

一本

少女らかたはれゆかし櫻かさゝ　花野　秀子

さゆかしくかる雛櫻かさゝ

ちいけぬ雛櫻

しりぬ櫻

棚に

徐つ日よりたおしむこころまで

おほかたの命は櫻なりけり

なしむろは櫻

甲府　名取正代子

文にあきて窓の戸あくれは月かゝる山櫻は霞なかりけり

かなかりけり

雲かゝ山櫻は霞なかりけり

青森　留目松子

年へても思ひ見まか花世にたくひなき

色香なるらん　岡山　貝原巌惠子

四方山の花のさかりにあくかれて歸さも知らす夕月の影　東京　際生紋子

みな人にさくらく とめられていかにせむ　淨法寺　小島敬子

あろ花にかあろらんと花なのに寄子

夜な夜な花は夢さへやまにわけ入りてひろ見　山口　國佐春子

ぬかたに花をなかむる花は朝日に匂ふ櫻　山口　國佐春子

夕月のかゝる梅にもます花は朝日に匂ふ櫻

なりけり　岡山　河瀬道子

武士の心ときける櫻花とつ國人やいかにな

かめん　函館　片岡初榮

そめてたかりける

たくひなき大和心のさくら花ちりにしあと

うらゝかに咲き匂ふなり櫻花長野原千代子

そめてたかりける

心してふけ　靑森　朝東鳳ゆく

雨はれて風のとかなる隅田川花は今日こそ

さかりなるらめ　靑森　田島愛子

うきこともなれはてつゝ長き日を

てけり山櫻花　岡山　清水梅子

もろ人によろこはれても咲く花を母の手向

にをるそかなしき　京都　花輪余志野

一枝な手折りて神にそなへまし今をさかり

の山櫻花　埼玉　加藤美代子

いふせしと思ひし里も春なれや都にまさる

花の咲きたる　靜岡　萩原さだ子

濡れぬとも櫻見てこむ此頃の雨のかへしは

風こそきけ　東京　赤澤英子

若菜摘む少女か髮に散りかゝろ姥子櫻の花

のひとひら　靜岡　多々良道子

年毎にいや咲きまさろ櫻花かくて千とせを

ひとへ思ふ　東京　戶塚鐵子

經なはとそ思ふ

日は落ちて夕淋しき城跡に二片みひらちる

櫻はな　福島　伊藤靜子

のとかなる春の光を一本にあつめて見する

山さくら花　山梨　芦澤露子

咲き匂ふ櫻を今日もたちれとおなしむし

ろに見ろそのしき　秋田　細矢はろ子

見ろたひに思ひそまさる亡き兄のかたみの

櫻花かな

櫻ほころひにけり　靜岡　里見優子

手折らんはいとつみ深し櫻花折らすは苞に

せんよしもなし　岡山　西村長子

春かすみ遠くへたてゝ峰高く雲かとまかふ

山さくら花　靑森　棚田満智子

春雨の名殘の露と思ひしは一むら咲ける櫻

なりけり　京都　内藤菊尾

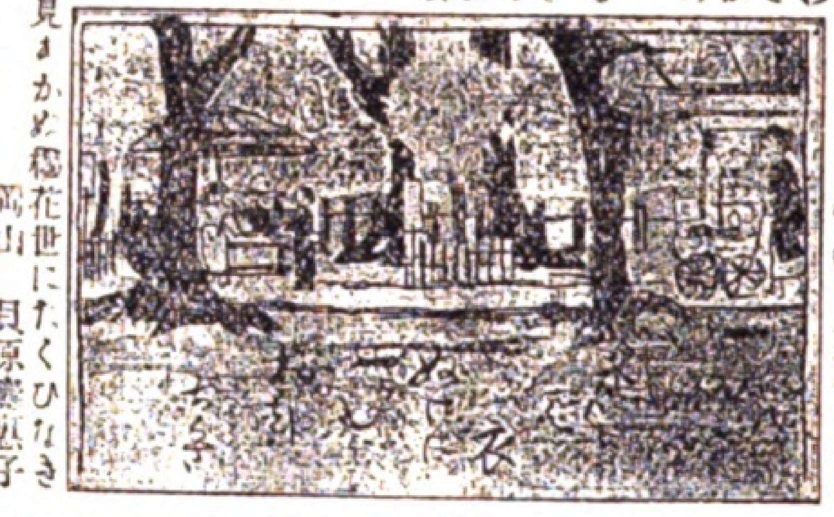
櫻さく花の園生をさまよひて浮世を長く

らすかな　石川　小阪夏子

捧けたる櫻の花も散りはてゝ君の御墓に春

はたけたり　東京　杉本文子

大井川花のこかけに舟さしてあかぬ色香に



日なくらしけり　京都　山本收子

○以下總て匿名とす

いかはかり嬉しかるらん上野なる花の都に

咲く櫻花　東京　某

▲評　花の都の上野にといふべき順序なり

いつかたにまつは遊はん春の野はやまとし

ま根に櫻みちけり　埼玉　某

▲評　三四句これも順序たがへり

春雨のふるたひたひに敷島の咲きこそ句へ

山櫻はな　鹿見島　某

▲評　敷島の咲くといふことあるべくもなし かゝる無理なる詞は用ゐたまふな

春風のふきのまにまに櫻花こゝろひろくも

匂ひぬるかな　愛知　某

▲評　心狹くもといふ歌あるを蹶みたるにや

白雲と見しな方の山櫻ちりても雪にまか

へられけり　新潟　某

▲評　例の翻案にとりがたし

外國の人に見よとほこらまし數島の

山さくら花　仙臺　某

▲評　萬葉家の遺風

深山木の中に一木の櫻ははなにあ

らはれにけり　東京　某

▲評　頼政卿の歌の二三句をかへたるのみ

心なしと人や見るらん山櫻めつるあまりに

手折しものを　福井　某

▲評　これもわがものならず

來る人も散る人もあり夜櫻の花にふけ行く

あけほの鐘　三重　某

▲評　曙になりて更行くとは如何

けふこそは見頃なりけれ櫻花さきもそろは

すちりもはしめす　東京　某

▲評　さきものらすといふ歌をそろはすとかへられたる拙し

新体詩

▲花のゑまひ（三等）　鎌倉　中限富士子

萬朶(ばんだ)の花(はな)のゑまひには

蝶(てふ)舞(ま)ひ小鳥(ことり)歌(うた)うたふ

誠(まこと)やさしくけがれなく

我(われ)なく世(よ)なく邪念(じやねん)なき

花(はな)のこころを知(し)る人(ひと)ぞ

花(はな)にもまさる花(はな)なれや

▲花(はな)の少女(をとめ)　名古屋　名取照子

アラお隣りのお花ちやん

まだお乳がたりないの

御覧よ東のお日様が

にこにこ笑つてゐらつしやる

もちつとたつたらお蝶さん

うくひすさんもお出るよ

それまで二人で遊ばふれ

さアさお歌をうたひませう

「久方の光のとけき春の日に

あそぶ我等のたのしさよ

この一時を世の中は

たゝ美しき花の國

神と人とは融合ひて

たゝ美しき愛の國」

うたふお花の歌につれ

空に雲雀のチ、チツチー

後向法選

天　京都　堀ちくさ

花見衣ぬけは一ひら櫻哉

地　京都　古川よね子

櫻花たとへは國の姿哉

人　北海道　佐藤つい子

咲みちて月も洩らさぬ櫻哉

十客

一枝も手折かれたる櫻かな　埼玉　森田竹子

此儘の空で置たし花七日　千葉　清宮佐久子

みよしのや行くも歸るも櫻人　三重　西山ひさゑ

誘ふて花にさし出す手燭哉　東京　彦坂たき子

千紫萬紅さて其中の櫻かな　東京　赤澤英子

粧飾りてこれ見よかしの花見哉　静岡　青木絹子

潔よく散つてはえある櫻かな　鎌倉　中限富士子

朽ぬ名は高し櫻に維の跡　熊本　黒川入代子

川渡す船にちり込む櫻哉　愛知　下郷すゑの

嘉靄へ雲とつもりしさくら哉　東京　菅谷八重子

○

瓢箪の踊つて戻るさくら哉　東京　尾崎悦子

雨や風猶むそこゝは花の山　千葉　清宮くら子

ふり袖にうけても見たき花の山　三重　庄司小久子

酒くさき人は來ずもがな櫻設　東京　杉本文子

内外の人仰ぎ見るさくら哉　靑森　田島愛子

花も葉も流石やさしや櫻かな　愛知　下郷きみ子

櫻狩り短く山に日落ちけり　京都　内藤菊尾

うるはしと見ろ袖にちる櫻哉　東京　渡邊やす子

花ふゞき傘なげばめて通りけり　靑森　吉田やす子

主や誰れ櫻にのこる轡狩　東京　西川ひな子

眞盛りも散るもめでたき櫻設　福島　横川千賀子

咲きつめて小枝をかくす櫻哉　秋田　西村ちか子

としとしにさきまさりけり若櫻　埼玉　加藤みよ子

人傳に聞くや郡の花のたより　靜岡　里見ゆう子

櫻花封して妹のよき詞か　函館　太田きよし

櫻時文字さへ花の櫻哉　名古屋　名取照子

秀才の少女召れけり櫻狩　三重　西山數子

田舎の馳走いそかし花の實　京都　磯谷澤子

見る限り人にうつくしき櫻設　東京　三宅久子

開會の上野に咲くや初櫻　東京　小島みき子

朝う櫻きそふ踊やる櫻設　靑森　茂呂そのこ

電信で今日もさくらの便り哉　北海道　加藤はる子

いろいろの姿して來る花見時　兵庫　宇野須磨子

花咲くや隣の留守のまろ櫻　橫濱　平戶すゑ子

風なくてつゆ重げなる朝ざくら　東京　西川花子

散際も大和心や櫻設　東京　中山由子

咲き出も散るも男まし櫻哉　京都　渡邊米子

ほめられて潔よく散る櫻かな　愛知　横井初子

花桶の椿に交る櫻哉　熊本　齋藤さき子

一日の人數へたり花の山　宮城　鈴木ちとせ

醉人の手に折られけり櫻花　石川　小坂夏子

たくひなき國のほまれや山櫻　愛知　市橋幾子

降る雨にちるや大和の櫻花　福島　八田くろ子

櫻咲くやきは和し村櫻　長野　植原千代子

下げて花尊れ出る櫻祭　京都　山本收子

瓢みかはす恩賜の酒や實櫻設　靑森　清水花子

汲み手の腰の枝のはる哉　埼玉　水野淑子

老媼手を腰の枝に櫻設　東京　秋元小菊子

智しの蝶に置ぬ花盛哉　廣島　白井政子

山のもなほ明き尾引く櫻設　山形　三田いく子

夜袖もみとれてる花の櫻山　京都　松岡代子

操りしまとてる花の櫻設　靑森　中津里子

奥まりし来けのやや花の櫻山　廣島　小田なほ子

咲きみちて御國の照らす花櫻設　靜岡　萩原さだ子

これか皆花かと許り吉野山

△選者吟

上野から今年は開く櫻かな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

座椅子

特許第九〇一〇號

本品ハ一箇ニシテ甲乙丙丁ノ四様ニ變化ス即チ甲ハ座椅子トナリ之ニ椅レバ西洋式ノ安樂椅子ノ如ク身體ニ從フテ輕動スルモ重力ノ中心ヲ失ハザル構造ナルニヨリ決シテ倒ルヽコトナクシテ愉快ナル休息ヲ與ヘ又甲ノ手摺ヲ後部ニ廻ハシテ乙ノ如クスレバ讀書ニ適シ更ニ手摺ヲ後部ニ送リテ丙ノ如クスレバ安臥ニ適シ使用終レバ丁ノ如ク疊ミ込ミテ携帶ニ便ス

○材料ハ鐵骨ニエナメルヲ塗リテ之ニ強靭ナル織物ヲ張リタルモノ又蒲團ハ優美ナル更紗、メリンス、友禪縮緬、等ヲ用ヰ清潔ナル打綿ヲ入レタルモノニシテ尚ホ後頭部ノ觸ルヽ處ニハ蒲團ノ下ニ螺旋狀ノ枕ヲ裝置シアレバ織物ト螺旋枕トニテ身體ヲ支フルニヨリ心地誠ニ宜シク老人、妊婦、及ビ胸腹部脚部等ノ慰安ヲ要スル病人ニ適シ特ニ喘息患者ニハ最モ好適ス

○初メ本品ヲ廣島陸軍豫備病院ニ送リテ日露戰役ノ傷病者ニ試用ヲ願ヒタルニ時ノ病院長ヨリ左ノ如ク申越サレタリ依テ斷然意ヲ決シテ之ヲ世ニ發表スルヿニ致シタリ

大西軍醫正より來狀

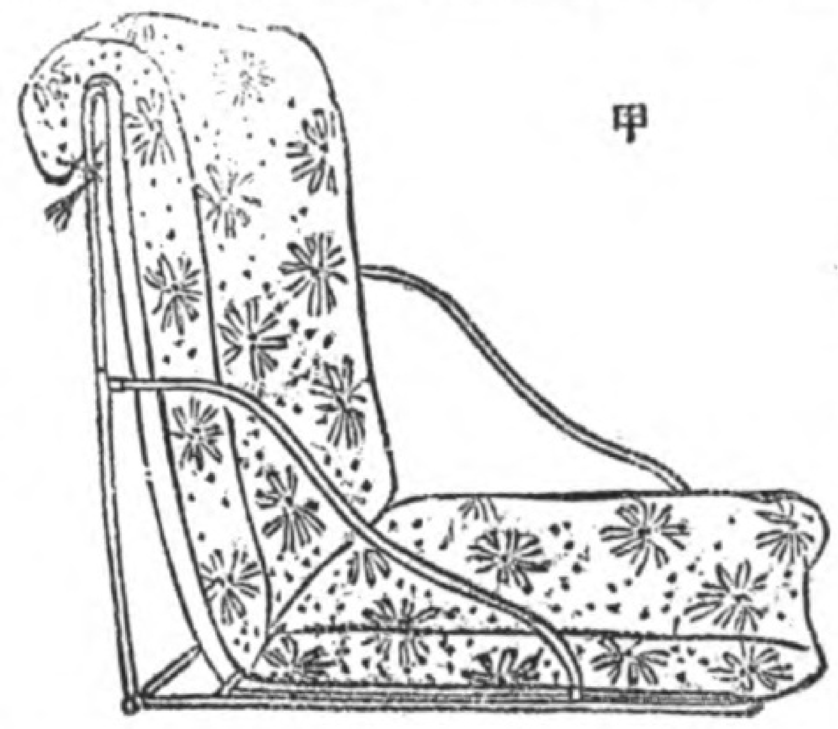
近來日本家屋用座椅子の類各種製造販賣するものあるも貴下發明の座椅子は他のものと選を異にし特に重症患者に適當なるを認む余は自から之を試用し又重症患者に應用せしに半臥位に於ける使用は最も好適にして從來患者を半臥位にするに或は三角蒲團を用ゐ或は積夜具を用ゐたるも工合甚だ宜しからずして貴下發明の座椅子により始めて安靜半臥位を得るに到れり此器の爲め今後多數患者に慰安を與へ治療を幫くる事多大なりと信ず

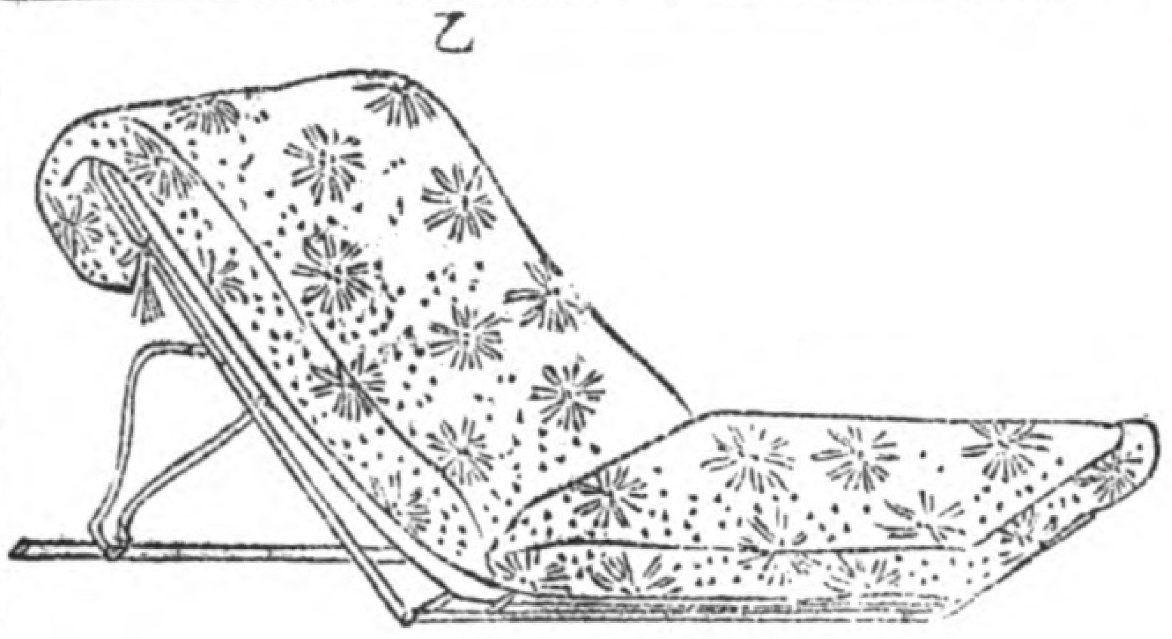
於廣島 陸軍一等軍醫 大西龜次郎

價格

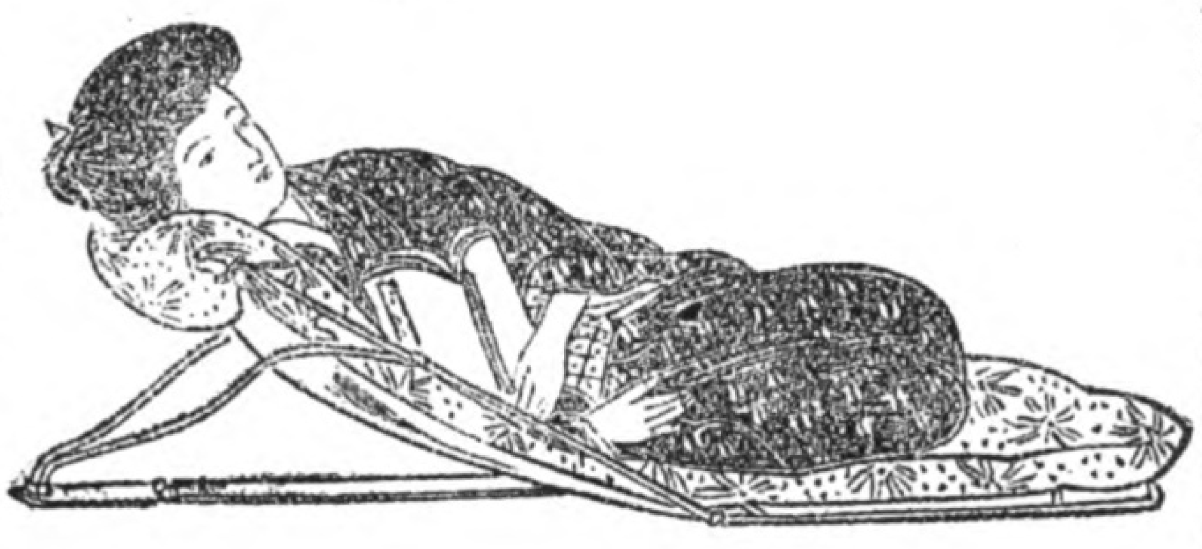
第一號	エナメル塗	並更紗蒲團付キ	金五圓五拾錢
第二號	上等エナメル塗	仝更紗蒲團付キ	金六圓五拾錢
第三號	上等エナメル塗	メリンス友禪蒲團付キ	金七圓五拾錢
第四號	上等エナメル塗	友禪縮緬蒲團付キ	金拾二圓五拾錢
第五號	上等エナメル塗蒔繪	上等友禪縮緬蒲團付キ	金拾五圓
第六號	最上等エナメル塗蒔繪	最上等友禪縮緬蒲團付キ	金拾八圓

從前ハ第三號以上ノ上等品ヲ製セザリシガ高貴ノ方々其他ヨリ上等品ノ御注文尠ラザルニヨリ今回第六號マデ製造スルヿニ致シタ





(本品ハ東京博覽會第二號館及ビ東京日々新聞社前ニ陳列ス)



(東京市內配達無料 東京市外荷造運賃共實費)

發賣所 東京市芝區下高輪町二十一番地 東禪寺電車停留所前(電話新橋三〇六五番) 武田樂氏堂

日本元祖西川洋琴

高尚なる音樂の嗜好は
家庭の和樂を作る基なり

宮內省御用東京音樂學校御用

橫濱市日の出町二丁目(電話八一四一番)

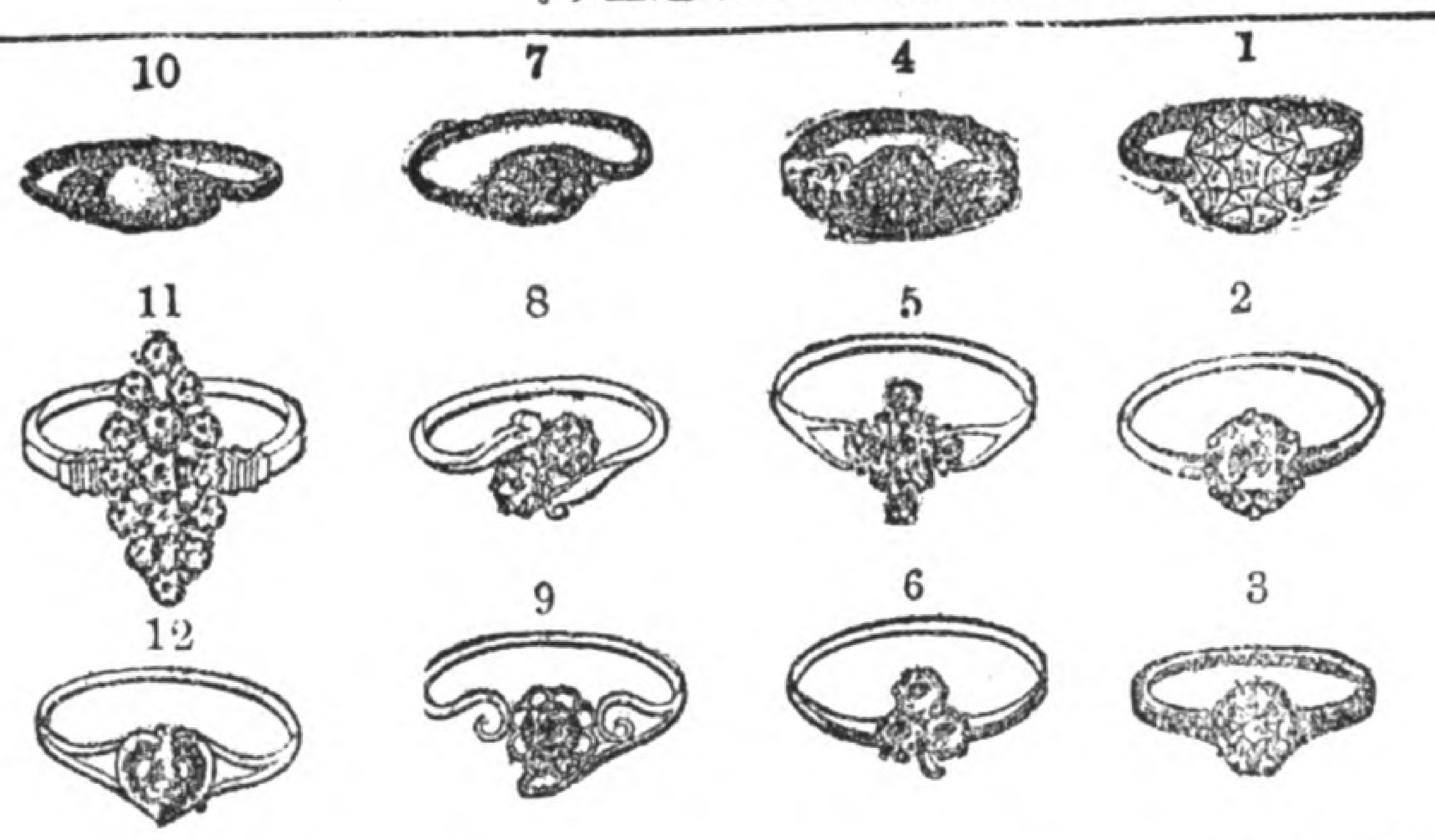
西川オルガン及ピヤノ製造所

東京販賣店 十字屋樂器店 東京市銀座三丁目

關西代理店 武內樂器店 大阪市東區順慶町四丁目

《西川洋琴の聲調は舶來品に劣らずと專門家の讃詞を得たり、定價表は御申込次第進呈す》

ダイヤモンド入指環



1	千二百圓以上	千五百圓
2	五百五十圓以上	六百圓
3	二百五十圓以上	二百八十圓
4	二百八十圓以上	三百圓
5	三百圓以上	三百五十圓
6	百二十圓以上	百四十圓
7	百六十圓以上	百八十圓
8	三百圓以上	三百五十圓
9	七十圓以上	八十圓
10	百圓以上	百三十圓
11	三百五十圓以上	四百三十圓
12	三十五圓以上	四十圓也

寶石商新製品
婦人裝飾品商
寶石鑑定發賣

東京市日本橋區若松町 光嘉

電話浪花七六八番

いかほど寶石の王なる金剛石でも品質に依て其の頭に等差あるのは甚しものです良好でない石の裝飾品は交際場裡に立つて却つて御品位を卑め給ふべしされば裝飾品の寶石は殊に善良純質の特品を御撰み遊ばす必要が御座り升そこで下店彼の地へ注文せし石舊年末着致せし故左記の裝飾品に調製し相成かぎり廉價に販賣致升故そ少に不拘御買上願上候

尙弊店にて御買取の寶石は御不用之節他品と交換亦は代金にて御引替些少の御割引にて引受候

●男子用(指環、手釦、胸針、釣釦、鎖り等)

●婦人用(指環、簪、帶ノ、襟留、鎖り、ブローチ 腕輪、洋裝々身具等)

杉原耳鼻咽喉科醫院

生義多年東京醫科大學耳鼻咽喉科に勤務の處今般辭任の上專門診察に從事す

診察 自午前八時 至午後三時 杉原正壽

神田區錦町壹丁目 (青年會館前)

御料御園白粉

御園 みその さくら 齒磨

製造元 東京芝 胡蝶園

發賣元 東京橋町四 丸見屋商店

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

登錄商標

赤門

白粉

世の進步に連れ益々化粧が必要の時代となり此化粧に缺くべからざるものは白粉なれ共從來の白粉は多く鉛製なるが故自然に顔の色青黒となり其他鉛毒の恐るべきは一般に認めらるゝ處なれば近來種々無鉛の白粉あるも多くは肌にのり惡しく不完全の爲めに歡迎せらるゝものゝ尠し幸に學者社會にも東洋人種に適當なる白粉の必要を認められ其途の博士方々が研究の結果最

無鉛無害にして完全

の白粉を發明せられ今度び一般需用に應ずる爲に其製造發賣を特に指定せられ

名譽赤門白粉

たるは斯家の最も其厚意に背かず原料を精選し價格も一般需用に適する處なれば名づけ販賣する務め製造しと名を希ふ

東京日本橋區馬喰町二丁目

花王石鹸本舖　長瀨富郎

追伸おしろいに赤門の名稱を付したるは帝國大學に因みたるものなれば御求の節は赤門に御注意あらんとを乞ふ

牛乳ノ主成分ニテ製セル

乳白化粧水 レート

東京 大阪 平尾賛平發賣

在來化粧水ニハ單ニ皮膚ヲ滑カニスルモノアレドモ未ダ營養ヲ與ヘ且ツ美艶純白ニスルモノナシ獨リ乳白化粧水レートハミルクノ有効分ノミヲ精製シ濃厚ナル香氣ヲ手加ヘ少量ニテ初多クノ皮膚ノ細胞作用ヲ活發ニスルヲ以テ自然ニ純白美麗ニシテ天然ノ光澤ト色彩トヲ與フ

定價 大瓶 金五拾錢 小瓶 金三拾錢

●東洋一 製造大販賣 卸小賣

●夜具 ●蒲團類 綿 ざぶとん

●上等並等澤山あり御好次第山の如し

●街鐵も外堀線も小川町東明館前下車を乞

東京神田區表神保町

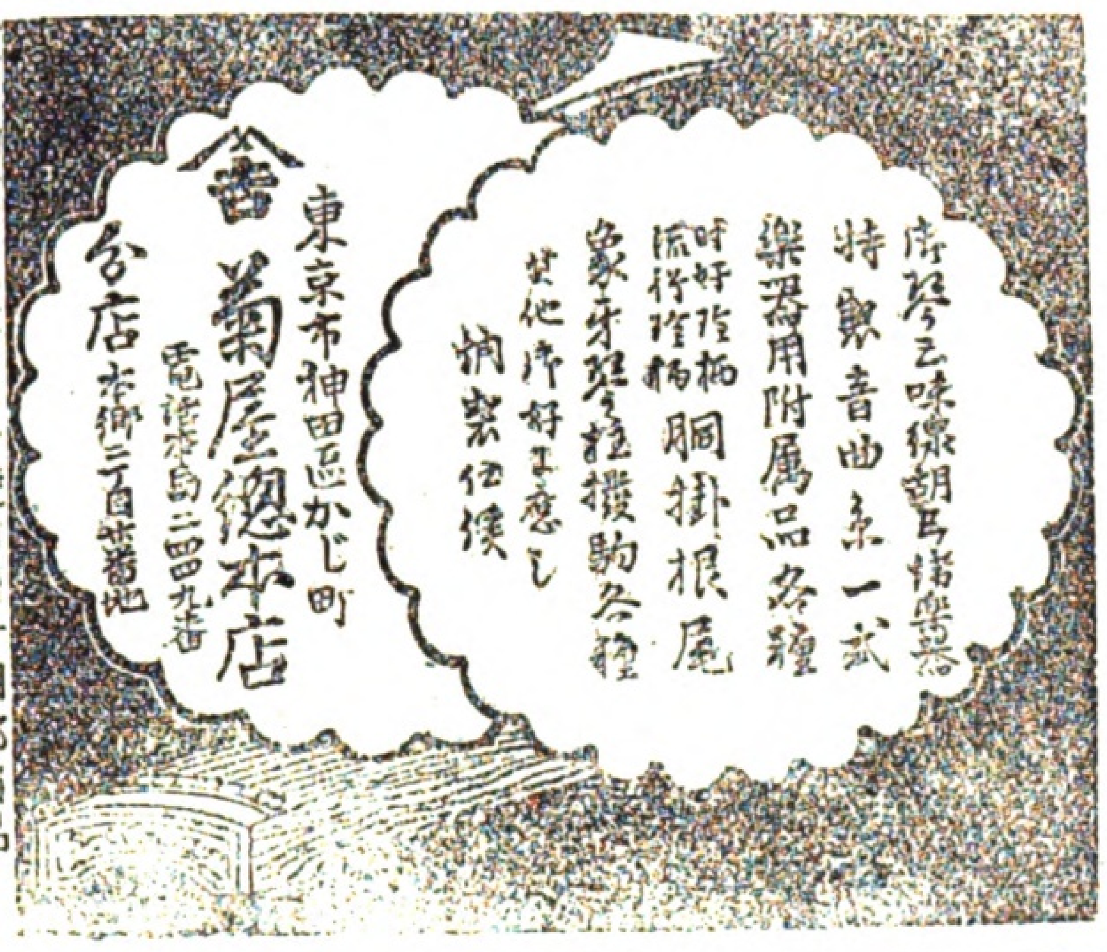
矢田商店　電話本局長二〇八

市内無賃配達

諸官省御用

●綿質保險附 ●確實大安賣 ●縱覽御隨意

東京勸業博覽會第一號館第十四部出品



調劑が正確迅速にして藥品の純良なるは藥局の特色なり

醫家處方調劑

東京淺草橋際茅町四ツ角

尾澤良藏藥局

電話下谷千六百〇二番

藥局長代任 藥劑師 船橋安吉郎

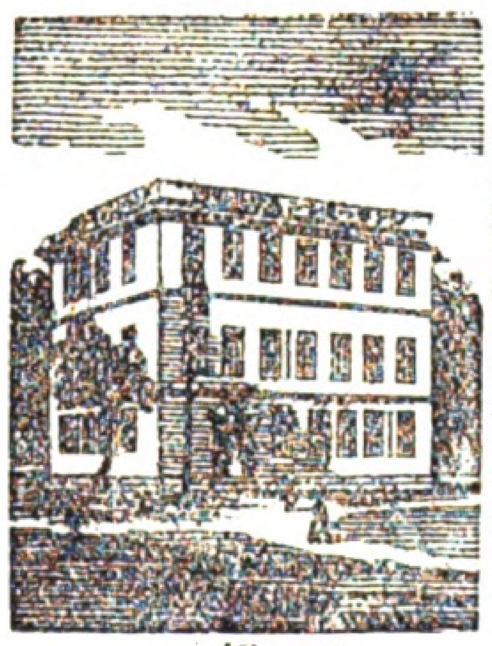
胃腸障害は往々疾病誘發の根元となり、又疾病癒の轉鈍ならしむ、而して胃腸障害の内、澱粉を不消化に因するもの甚だ多し。殊に米飯を常食とする本邦人に於て然りとす。之を救濟する一に完全なる澱粒消化藥あるのみ、此目的に向て、余は高峯博士の發見に係るタカヂアスターゼを使用し、好果を收め、此種の製劑中最優等のものたることを確信す

醫學博士 井上善次郎

消化新藥

高峰博士發見のタカヂアスターゼが唯一の澱米消化藥として著大の効力を有することは業に夙に世の定評あり今や予は其實驗に基きタカヂアスターゼが結核患者の消化障害に對する著效を確認すると共に此の患者に毎にこれが服用を勸告する者なり

醫學博士 栗本東明



シンガー裁縫機械會社

北米合衆國紐育市

東京支店　東京銀座三丁目拾二番地

大阪支店　大阪心齋橋筋二丁目五十六番地

長崎支店　長崎大工町拾六番地

東京支店名古屋監督店　名古屋玉屋町九十六番地

一シンガーミシンは世界中一番高價なミシンですが、輕くて使ひ易くて、奇麗で、機械の構造が完全して居ることも亦世界第一です價か五圓、十圓斗りの差ですから、全じく買ふのなら始めからシンガーミシンを御買ひなさい、經驗上御すゝめ致します」……とはミシンに委しき夫人方の實驗談！斯くの如く洋服店、裁縫店、足袋商、シャツ商、靴商に○○○○○○○○○○○○大好評を得たるシンガーは今や家庭の第一要具として全國の婦人に歡迎せられつゝあり而してシンガーミシン專門の裁縫學校も漸次増加し、東京のシンガーミシン裁縫女學院も新築工事は昨年七月中既落に成しました……

定價表目錄等申込次第進呈す

ミシン裁縫專門教授

規則書進呈郵券封入御申込あれ

東京麴町區有樂町一丁目五番地

シンガーミシン裁縫女學院

大阪東區北濱壹丁目六番地

シンガーミシン裁縫女學校

金銀盃類

貴金屬寶石美術品袋物一切何品に依らず迅速と廉價を旨とし誠實に新調又は改作の御用相勤め可申候間何卒一層の御引立を以て多少に不拘御下命被下度奉願上候

宮内省御用達　玉寶堂

電話下谷 特九六五番 一二四四番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

高等香油
チエリーオイル
紳士貴婦人令孃用

本品は無色透明さらくとして水の如く馥郁たる香氣は恰も香水に異ならず故に紳士は勿論、貴婦人令孃方に目下大に流行せる彼の束髪用として非常に高評を博しつゝあり
定價入十五錢、四十五錢廿五錢（送料各十錢）
寶捌は全國有名なる小間物化粧品店にあり
東京日本橋區本町二丁目
發賣元　高橋初次郎
特電四一一三番

日本政府登録濟

ブーケムスクオイル
ブーケムスククリーム
ブーケムスク香水
ブーケムスク煉水白粉
ブーケムスク化粧
日本輸入一手販賣
東京市日本橋區馬喰町四丁目
ガマ印歯磨本舗
内外石鹸化粧品卸商
龜岡亀王堂

日本女學校生徒募集
●規則入用者は貳錢郵券送れ●東京本郷龍岡町●電話下谷一二五五●寄宿舎あり

めぐみくすり

東京勸業博覽會第二號館出品
及不忍池畔辨天際賣店新設
東京神田小川町壹番地
金銀寶石細工
西洋小間物化粧品
今石舍美術店
電話本局六八一番

小町印
帝都唯一
學生袴
日本橋區馬喰町
永井商店
電浪花八〇〇

胃病良藥
太田胃散

吳服物一切は
精撰直段の廉なるは弊店の特色なり親切を旨として販賣可仕候
西陣織物は　御好御註文に應じ直に織立申上廉價に販賣可仕候
御染物は　模様其他一切の染は京都の特色にして綺巧に染上可申候
吳服切手は　御進物用の便利を計り美麗なる装飾にして販賣仕候
地方御注文は　御便宜の大略御申越被下候はゞ品物撰定の上代價引換にて迅速に御届可申上候
京都市西洞院通松原
だいまる
熊谷吳服店

最新流行
美術蒔繪櫛
美術小間物類
象牙細工類
束髪用品
和洋化粧品
香水石鹸
東京日本橋通り一丁目
よし川
電話一二〇

本店　神田小川町通り（電話本局二八五三）
出店　新橋博品館階上・横濱出張店・樋演館・赤坂田町五丁目支店
よしおかや
神田小川町
東京勸業博覽會第三號館出品
及不忍橋雪見橋際賣店

カメリヤ洗粉
時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細く艶を増し肌を滑かならしむる最新發見の洗粉なり年若き方のみならず老年の御肌には殊に効驗著し
定價　大瓶入廿五錢　瓶入十二錢　小袋入三錢

發賣元
小林富次郎

東京女醫學校生徒募集
戰後女子教育の發展は女醫志望者益增加するに至れるを以て本校は此趨勢に應じ校舍を增築し來る五月一日より開始の新學年に際し左記人員の入學を許す
◎前期生二百名　後期生五十名　◎入學試驗期日四月二十五日
但し高等女學校卒業者は無試驗入學を許す○入學願書は四月廿日迄に東京市麴町區飯田町四丁目九番地東京女醫學校事務所へ提出すべし
○規則書は郵券三錢を要す

追々着荷
歐米各國御婦人用品率先輸入
御婦人装飾品多數
西洋諸小間物一式

東京市京橋區銀座三丁目
伊勢與
三枝小賣店
話新橋三九二七番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

男女兩用煉香油（大瓶・小瓶）
ビューテーオイル

此煉香油は毛髮の發育を助くべき數多植物性の善良なる油を集め高尚なる芳香を加へ精製したる品にして容儀を正ふすべき紳士淑女の缺くべからざる化粧料也

ビューテーは　毛髮を黑くし艶を出だす

ビューテーは　毛髮を和らげくせを直す

ビューテーは　毛髮の汚れふけ等を去る

注意　油を手のひらにて能くすり溶解して用ひらるべし　夏季に至り結晶の和らかく溶解氣味なるも効用にはかはりなし

發賣元
東京日本橋區通町　ゐつゝ油本舖　井筒屋香油店
東京日本橋水天宮前　象印がはみき本舖　安藤井筒堂
大阪南久寶寺町四丁目　ゐつゝ油支店　象印代理店　藤森源之助

大好評
ケーバー香水

賣捌所は到所和洋小間物唐物賣藥化粧品店にあり

小瓶　貳拾五錢
大瓶　壹圓

直輸入元　日本橋橘町二丁目　竹間商店

サッポロビール

肥後名産今村朝鮮飴

◉博覽會と土産物◉

●今村朝鮮飴は體裁優美なれば四季の御進物に尤も適當なり

●今村朝鮮飴は滋養に富み消化容易なれば衞生上平常の好食品也

●今村朝鮮飴は病中病後又産前後に尤も有効の食料品なり

●今村朝鮮飴は五二共進會に於て有功賞牌を受領せり

●今村朝鮮飴は五二共進會に於て東宮殿下御買上の榮を賜へり

●今村朝鮮飴は市內有名の菓子舖並に西洋食料品店にて販賣す

◉賣店は博覽會內◉外國館門前三組屋風味亭ニテ販賣仕候間御用命被下度候

發賣元　東京芝三田　今村支店

小間物

三井屋商店

東京神田區[illegible]本店

電話本局二[illegible]六番

新橋際博品館內支店

小川町通東明館內支店

帝國五二館內支店

ゑ里善

日本橋人形町通ふきや町　電浪一貳七[illegible]番

別染　めりんす　友染　衣物　新柄

おだわや

人形町通　住吉前　赤のれん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

西洋酒鑵詰食料品
清酒　壜詰
世界長
御進物用　美麗箱入
最上清酒

世界長は內務省衛生試驗所に於て、試驗を經たる最良清酒なり
世界長は器械口瓶詰なれば體裁最も美麗にして用量を定めて飲用するの便宜あり
壜詰　一升入　四合入　貳合入　一合入の四種
東京日本橋區堀江町四丁目
（通稱てりふり町通り）
發賣元　高橋商店
電話浪花一五六一番
東京勸業博覽會第二號館酒類ノ部ニ出品

日本第一の大勸業場
東京新橋角
帝國博品館
電話新バシ一六五二・一三六

皇孫殿下御用
東京名物
風船のあられ
風船あられは輕快淡泊にして滋養に富み且遠路への御土産物には尤も適當の良菓子なり
東京市下谷東黑門町七
本舖　東英堂

最上醬油
キハク印
於臺灣共進會
名譽大賞牌受領
醸造元　千葉縣野田町　茂木七郎右衛門
（商標キハク印）
キハク印醬油は味がよくて調理にかなつて居ると云ふことは皆さん一般の評判ですどーか其あぢのよくてそして經濟であると云ふことを御ためし願ます
東京支店　日本橋區小網町三丁目
中野長兵衛
電話浪花五七七四

五二共進會　宮内省御買上ノ光榮ヲ得タリ　銀牌受領
香油パーレル

日本發賣元　東京平尾贊平

專賣特許　安樂椅子開店
賜宮内省御買上之榮
於五二共進會進歩銅牌受領

○安樂椅子は高尚優美にして座敷用に適し且つ堅牢にして折疊自在なれば携帶にも又至極便利なり
○安樂椅子を平素使用すれば自から姿勢を矯正し殊に胸部背部腰部等の諸病を未發に防ぎ衞生上缺くべからざる用具なり
○安樂椅子は長時間の事務を執る方又は御婦人方の裁縫及び觀劇宴會等に使用すれば頗ぶる便利なり
○定價並品金一圓廿錢より以上各種但裝飾上掛は御好次第別に代價を申受く
東京日本橋區兩國元柳町卅八
製造發賣元　加藤商會
四ッ谷鹽町三丁目十九番地
特約大販賣店　今井林次郎
日本橋區通り一丁目
特約大販賣店　西川甚五郎
電話本局（九四七）
特本局（九四八）
京橋區尾張町二丁目一
特約大販賣店　今井商店
電話新橋（四八三）
橫濱市相生町五丁目八十六番地
特約大販賣店　今井林次郎
市內及地方特約販賣希望者は御來談乞ふ
市內は御一報次第多少不拘持參可仕候

英國最新輸入
眞正　ミイーン白粉
高等香油　クイーンオイル
本舖　東京　三井花陽堂

故奥村刀自戰地慰問紀念號
愛國婦人記者手島益雄著
婦人の慰問使
好評第七版
全一册
定價金拾錢
郵稅不要
日露の戰ひ酣なるの時、一個巾幗の身を以て遠く滿洲の僻地に入り、忠勇武烈の將卒が勞を犒ふ、事既に前代未聞の逸蹟たり、當時傳て以て其の美事を說くもの多かりしと雖も、本書の如く其の行程顚末を評述したるものなし、故に一度これを繙けば、戰地に於ける猛將勇卒、將た慰問使たる奥村刀自の面目紙上に活躍すると同時に旅順の堅壘、滿洲の戰場歷々として睹るが如し、今や平和克復して奥村刀自また亡し、これ戰争と愛國の女傑が遺したる紀念の書、國を愛する士女の一讀せられむことを望む
東京市麴町區九段坂下
愛國婦人會內
愛國婦人發行所

補血良劑
ワポール藥肝油
補血劑として稀世の卓効を有する新藥にして少しも異臭を存せざるのみならず飲用に適すに清快なる香氣を有するを以て婦女子も尙喜びて服用する事を得べし
○品切の處漸く今般新荷到着仕候間陸續御愛用ヲ乞フ
東京日本橋區本町四丁目
合名會社島久商店
（電話本局三〇一八）
（電話特本局四九一）

愛國婦人記者
手島益雄著
農村の幸福法
全一册
一月一日發兌
鮮巧美麗ナル繪畫數葉挿入
定價金三拾錢
郵稅金四錢
昔は商賣性來と女大學さへあれば家も村も圓く治まつたのである併し進步したる現代は斯んな陳套なものでは家どころか自分の身の始末さへ出來ぬ本書は著者が多年歸究したる家庭問題を基礎として町村の產業を發達せしむべく編むだもので結婚から始めて敎育は云はずもあれお寺を活かして使ふ方法辻角力芝居に至つて娛樂を受くる方法を敎へ其他臺所の事火の用心の事等有ゆる町村の幸福を呼號したもので町村長も警察官も神主も僧侶も醫師も親も息子も嫁も娘も老人も子供も世の中が厭になつて死にたい者も孕むで苦むで居る者も職業なく家なく困つて居る者も是非一讀すべきの價値がある讀めば必ず幸福を得られる町村の寶典也
發行所　東京市本郷區駒込東片町百十一番地（振替貯金三三四〇）
新公論社
取次所　東京麴町愛國婦人會內（電話番町五二〇）
愛國婦人發行所

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

都足袋粋乃友

◎都足袋ハ曩ニ農商務省ニ出願シテ登錄商標專用ヲ得タル物ナリ
◎都足袋ハ外觀優雅ニシテ現ニ都人粋士ノ歡迎ヲ受ケツヽアリ
◎都足袋ハ踵ニ縫目ナク衣服ノ裾ヲ傷フヿナシ
◎都足袋ハ製作ニ至大ノ注意ヲ拂ヘリ故ニ具合適良ニシテ縫目ノ破綻スル虞ナシ
◎都足袋ハ材料最モ優逸ニシテ經濟上尠ナカラザル効力ヲ有セリ

三重足袋君が益

◎三重足袋君ガ益ハ甲三重底三重ナルヲ以テ優ニ群ヲ抜クノ耐久力ヲ有ス
◎三重足袋君ガ益ハ甲三重底三重ナルヲ以テ常ニ道上性ノ方ニハ特殊ノ効力ヲ有ス
◎三重足袋君ガ益ハ甲三重底三重ナルヲ以テ脂肪ノ滲出ヲ遮ギリ體温ヲ保ツノ効力アリ
◎東京勸業博覽會第二號館入口ヨリ東南偶足袋商組合内ニ出品仕候

龜屋

東京日本橋室町三丁目　龜屋足袋店
電話本局一七一二番　宮内清兵衛　(電略カメヤヌカ)

ラクダ印麝香石鹸は高貴なる麝香に愛すべき「スミレ」の香料を多量に含むが故一度使用せば其香氣五日間馥郁としてかほりを失はざる一大特點を有す

定價　大形廿錢　小形十錢

東京日本橋區本石町三丁目　芳香藥種問屋　本舗　井上太兵衛

第四回新學期開始

會員大募集 三月三十日まで入會金全免

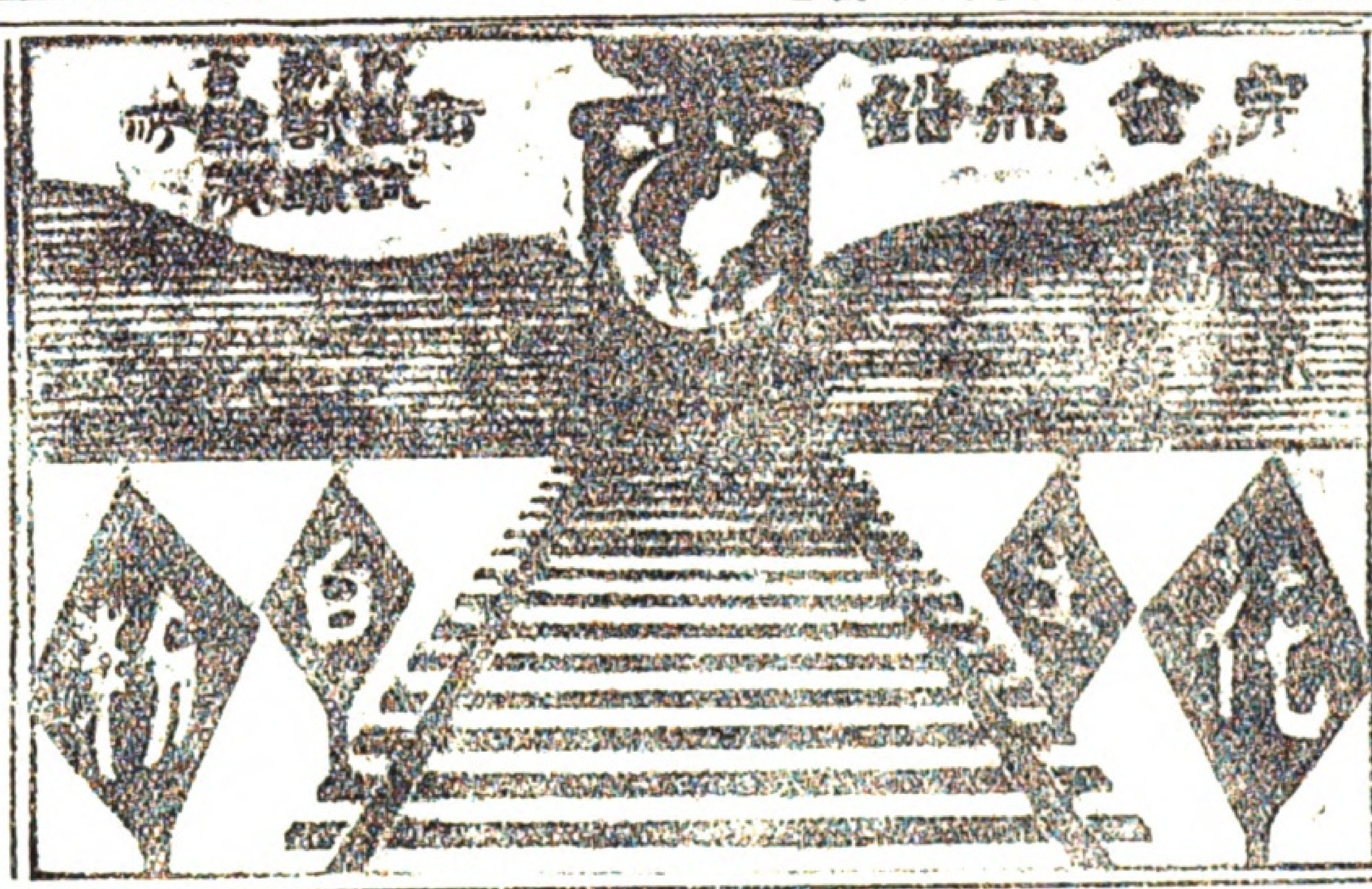
女學講義錄

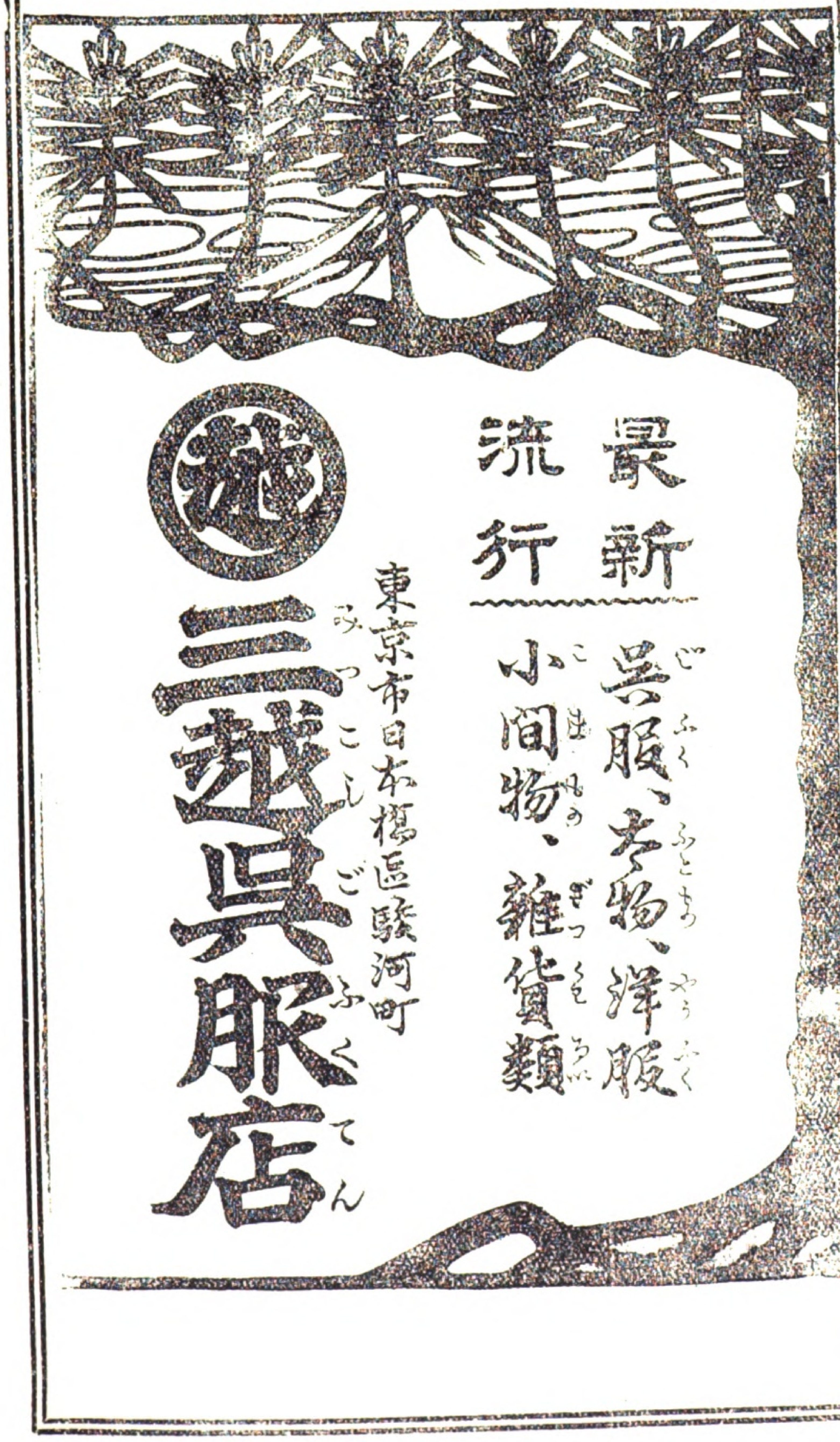
◎本會は下田棚橋津田諸女史の賛助に成り講師は皆斯道專門の大家也◎會費最も低廉都會一ヶ月の遊學費にて全期を了はるを得

◎中央新聞曰く講述何れも平易にして親切なれば初學の女子の講習には最も可なり◎報知新聞曰く天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有すると斯くの如きは稀れ也◎都新聞曰く講義平明にして用意親切なり

父母の膝下に在て高等女學校全科を僅に二ヶ年で修了する事が出來ます
講義は文部省令に據れるは勿論更に家庭の實用に適する科目を加へ丁寧懇切に講述します
◎規則書申込次第直に進呈すべし◎

大日本女學會
東京神田南甲賀町十番地





各女學校御用
附屬品并に造花器械類一式

東京市日本橋區横山町一丁目十六番地
天野卯兵衛
電話長浪花一六四三番
振替貯金口座四九七番

營業目録御入用なれば愛國婦人を見てと御書添へ御申越被下度候

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

東京市麹町區錢瓶町（常磐橋内）

日本興業銀行

電話本局（三、三〇〇番・四一一番）（特）一三七〇二番

資本金壹千七百五拾萬圓

營業科目

一擔保附社債に關する信託業務
一有價證券其他貴重品等の保護預
一有價證券の賣買元利金の支拂及び取立
一地方債、社債、株式等の發行募集事務
一各種の信託事務
一國債證券、地方債證券、社債券、株券の擔保貸付及手形の割引
一國債證券、地方債證券、社債券の募集又は引受
一法律規定に依り設定したる財團を抵當とする貸付
一定期預金、當座預金、特別當座預金

東京市日本橋區通一丁目

合名會社 森村銀行

電話（特）本局六七三番
電話本局四九八番

定期預金　六ヶ月以上　年五分五厘
當座預金　百圓に付日歩　八厘
當座預金　同日歩　壹錢壹厘

東京市日本橋區小舟町三丁目

株式會社 第三銀行

電話浪花四〇一・浪花四五一一番

預金利子
定期預金　六ヶ月以上　年五分
當座預金　百圓ニ付日歩　八厘
別口當座　同日歩　壹錢
全國送金爲替取扱料
其他銀行一般の業務便宜取扱可申候

天下一品

最上醤油

釀造元　千葉縣野田町　茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

スコット乳菓

咽喉諸症肺炎其他貪血病ニ著人ア効驗ノり早ク試賜ヘ

說明書ハ横濱郵便局私書函第五十八號
スコット乳菓部ヘ御申込アレバ無代價ニテ進呈ス
代理店横濱市山下町廿八番館

米國貿易商會

徳用 大俵炭　堅炭　土釜

右大俵炭は山出しのまゝにて壹俵の目方は拾貫目内外皆かます入に候賣買は目方に掛け候故至極御經濟の燃料に候間是非一度御ためし願度御用の節は電話又は端書にて被仰附候へば遠近多少を問はず無賃配達仕候

東京市神田區三崎川岸
電話本局三千弐百八番
戸塚商店

東京勸業博覽會第二號館出品
尚不忍池畔雪見橋際賣店新設

京橋銀座一丁目 木村屋

袴乃親玉

東京日本橋區長谷川町
卸部 美濃磯本店
電話浪花二八九九番

本郷區本郷五丁目
小賣部 美濃磯本郷支店
電話下谷一四一五番

淺草區諏訪町
美濃磯淺草支店

日本橋區佐内町
美濃磯佐内町支店

神田區小川町
美濃磯神田支店

深川高ばし際
美濃磯支店

芝區新櫻田町
小田商店

牛込區神樂町一丁目
伊澤商店

四谷區傳馬町一丁目
伊澤支店

院長 醫學士 鳥山南壽次郎
鳥山内科院
京橋區鎗屋町十一番地
電話新橋千七百四十六番
午前診察
午後往診

小兒病診療
醫學士 内田愼太郎
淺草區福井町貳番地
宅診午前
往診午後
電話下谷七一八番

産科婦人科專門
ドクトル 樋口繁次
歸朝後於本院診療に從事す
二各科　診察從前の通
芝愛宕町
電話新二六四
同二二〇
東京病院

◎婦人科
◎小兒科專門
午前宅診
午後往診
東京市麹町區飯田町四丁目九
女醫鷲山彌生

小兒科診察
特ニ乳兒ノ疾患及ビ育兒法
小兒皮膚病
診察時間（午前九時ヨリ十二時）日曜午前
獨逸新式種痘
拙者儀久シク獨逸大學ニ於テ斯學ヲ專攻シ歸朝後毎日診療ニ從事ス
ドクトル メヂチーネ 長井岩雄
日本橋區數寄屋町一、（電本百八十）

第廿六回
産科婦人科學講習
四月一日より三十日まで毎日演習
醫術開業免狀所有者三十五名を限

第三回
高等産科婦養成所
眞正なる産婆看護婦志願者五十名
三月末日迄に履歷書願書差出べし

東京日本橋區濱町三丁目七
楠田病院

◎婦人病專門
院長 櫻井克己
芝明舟町十九虎門外宮様前
電話新橋三三二四
櫻井醫院

◎水原産科婦人病院
○所在神田區猿樂町十二番地（電話本局千八〇九番）○外來診察午前中○入院往診隨時○同院に私立産婆學校の設あり

東京神田區美土代町三丁目十七番地
内科一般
午前宅診
午後往診
板垣亨
電話本局貳千九百七十番

眼科專門
神田區連雀町十八番地（郵便局前）
（診察）午前七時ヨリ十二時
午後三時ヨリ五時迄
ドクトル メヂチーネ 宇良田唯子
▲毎月第一日は診料藥價共無料

院長 醫學博士 榊順次郎
副院長 醫學士 久保徳太郎
婦人科産科榊病院
東京麹町三番町卅三（電話番町三九五）

内科小兒科　特に呼吸器病
ドクトル 川瀨元九郎
麹町はやぶさ町二十八番地
電話番町八二二番

神田區西今川町三番地（電話本局三〇一九）
内科病特に脳脊髄神經疾患
院長 ドクトル メヂチーネ 峰秀世
峰内科醫院

秘尿器科 ○ 梅毒科　午前午後
生殖器
牛込横寺町二八
郵便局上左横町
杉田醫院

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

愛國婦人廣告取扱
京橋區數寄屋橋外 弘報堂
神田三河町 博報堂
京橋區南紺屋町 一星堂
京橋區南鍋町 秀逸社
日本橋區上槇町 萬年社
日本橋區箱崎町 春風舍
京橋區宗十郎町 正路喜舍
京橋區日吉町 帝國通信社
同區彌左衛門町 京華社支店
同區南鍋町 廣告社

軍事教育會廣告

預約廣告

陸軍省編纂　印刷局製版　陸軍大臣の上奏文石版刷

明治三十七八年戰役感狀寫　全

美濃判千五百頁
並製背皮洋裝金貳圓五十錢
小包料金參拾錢

右は陸軍大臣より兩陛下及皇族に獻上せられたる物にして家庭及軍隊學校等に於ける精神教育上極めて有益なるものなり望みの向は來三月三十一日迄に前金相添御申込相成度候製本四月十日出來致候也

露國參謀大學教官バイオフ大佐編纂
日本參謀本部飜譯

軍事新報臨時增刊

日露戰爭

定價十冊金壹圓五拾錢
郵税豫定金參拾錢

右は日露戰に參加したる五、大、中佐の參謀か露國大學校の講堂に於て卒直眞摯に兩軍に對し評論講述せられたるもにして之に對し間々各軍參謀長等の辨疏あり興味甚だ深きのみならす日露戰役の眞相を知るに足る大文字なり左の方法に依り同好の士に頒つ

一全部を別ちて十冊と爲し三月より凡そ毎月一冊宛發行の事
一全部一時に前納せらるるか又は常に一冊分宛前納せらるゝ事但し途中に於て購讀を中止せらるゝ時は沒收の事
一軍事新報購讀者に對し特に壹冊四回分の代價を以て配附致候
一郵税拾錢未滿の過不足を生ずるも精算を行はさる事

東京市ヶ谷見付內
軍事教育會
電話番町六九四
振替口座四〇五四

既刊出版圖書目錄摘要

士官學校中央幼年學校合譯
三版 **將校の本分及義務**
右獨逸將校の處身及處世の方法を詳述したるものにして眞に吾人の錦嚢なり會友(軍事新報購讀者は會友に準ずるを得)の需めに應ず
實費金廿五錢　郵税金四錢

士官學校譯(一二卷は參謀本部監譯)
三版 **大戰學理**(全八冊)
本書は獨逸兵學海の泰斗たるクローゼヴェッツ氏の一大著作にして世既に定評あり喋々を要せざるべし(會友等の需めに應ず)
實費金貳圓四拾錢　郵税金參拾錢

陸軍步兵中佐和田音五郎氏著
三版 **應用射擊**
定價金廿五錢　郵税金六錢

列國射擊教育比較
右は歐洲五大國の射擊教育を比較詳論したるものなり會友(新報購讀者も會友に準ずるを得)の需めに應ずるとと爲せり
實費金參拾錢　郵税金八錢

陸軍士官學校譯
再版 **戰術上の決心及命令**
定價金四拾錢　郵税金六錢

陸軍少將松川敏胤氏著
第八版 **支隊の戰術實施**
右は獨逸陸軍大學校の教授法に依りて講述したるものなり
右久しく品切の處今般第八版發行致候也
定價金五拾錢　郵税金八錢

幹部手簿
定價金拾錢(半年分)　郵税金貳錢(携帶式)

第三版 **露國諸兵戰鬪法**
定價金廿五錢　郵税金六錢

故陸軍步兵中佐橘周太氏著
經驗餘錄
定價金貳拾錢　郵税金四錢

三版 **戰術講究錄** 第一、二集
獨逸步兵中佐エルフォンブリーゼン氏著　陸軍步兵大尉野澤悌吾氏譯
定價各金卅錢　郵税各金六錢

三版 **步兵戰鬪展開**
定價金參拾錢　郵税金六錢

再版 **步兵戰術**(小隊中隊の部)
定價金貳拾錢　郵税金四錢

騎兵實施學校長陸軍騎兵大佐秋山好古氏閲　同戰術科長陸軍騎兵少佐河野秀一郎氏著
再版 **騎兵戰術論**
定價金貳拾錢　郵税金四錢

三版 **典令問答** 第一、二集
典令教範等の質疑に對し親切丁寧に答案を付したるものなり
定價各金拾錢　郵税各金貳錢

軍事新聞　每土曜日發行
一部定價金參錢　郵税五厘
一ヶ年壹圓八拾貳錢前納者には表紙を贈る

◉軍事新報は軍事界に於ける唯一の週報雜誌なり
◉軍事新報は記事確實所説著實にして又適切なり
◉軍事新報は世界陸海軍事の趣味ある小天地なり
第二期第一號より第五十八號迄取揃へあり
並製定價金廿錢　郵税金四錢
上製定價金卅錢　郵税金六錢

第二版 **斷機慨錄**
故陸軍步兵中佐橘周太氏著

八版 **新兵教育**
陸軍步兵中佐竹內武氏著
定價金八錢　郵税金貳錢

第十三版 **各個教練**
定價金拾錢　郵税金貳錢

陸軍步兵大佐遠山實道氏著
吾人の軌範
定價金貳拾錢　郵税金四錢

士道日記
陸軍少將竹內正策氏著
右は優勝なる精神を得せしめ秩序ある生活を爲さしむるを目的とす
定價金五拾錢　郵税金拾錢

再版 **禮法** 附北京曲禮一斑
定價金八錢　郵税金貳錢

獨逸陸軍少將G. A. KLEIST氏著　日本陸軍步兵少佐野澤悌吾氏譯
搜索勤務
定價金貳拾錢　郵税金四錢

三版 **步兵夜間教育**
故陸軍步兵中佐橘周太氏著
定價金拾錢　郵税金貳錢

軍人之信仰
右は[illegible]勅諭を捧讀せしむるを目的を以て發行したるものなり
定價金拾錢　郵税金貳錢

兵卒手簿
右は兵卒の自修を獎勵し反省を促し遂に善良なる軍人たらしむるに在り
定價金貳拾錢　郵税金六錢

陸軍中將中村覺氏著
第四版 **軍人勅諭講義** 全
定價金五錢　郵税金貳錢

陸軍大將寺內正毅氏著
第三回訂正第十七版 **在鄉軍人心得**
伊東元帥寺內大將桝村中將小笠原子爵校閲　伊崎少將橫井編修校訂
定價金五錢　郵税金貳錢

軍事教育會理事步兵大尉高橋靜虎氏編纂
訂正第九版 **軍人讀本** 三冊
定價金卅六錢　郵税金拾錢

第五版 **精神教育談** 第一、二、三集
定價各金拾錢　郵税各金貳錢

戶山學校實施
精神教育談 第四集
定價金廿五錢　郵税金四錢

三版 **體力手簿**
定價金五錢　郵税金貳錢

陸軍砲兵大佐柴五郎氏口述
北京籠城(附圖三面添)
定價金四拾錢　郵税金六錢

子爵小笠原長生氏著
英皇戴冠式參列 **渡英日錄**(寫眞十三枚入)
定價金四拾錢　郵税金八錢

班長手簿
定價金參拾錢　郵税金八錢

士官手簿
定價金四拾錢　郵税金八錢

陸軍大學校兵學教官　陸軍少佐山田軍太郎氏著
三版 **初級の戰術**
定價金參拾錢　郵税金八錢

士友
每月一回八日發行
定價一冊金貳錢郵税五厘
第一號より取揃あり
當時第十二號
右は士友國の機關雜誌にして大和魂武士道を扶殖涵養せんと欲するに在り精神教育上最も有利にして最も廉價なり

教育はがき(五枚一組)
定價金拾錢　郵税三組迄二錢

武士道端書(三十二枚)
定價金貳拾錢　郵税金貳錢

軍人ハンカチーフ
壹枚金六錢
遞送費三拾枚毎に二百目の小包料

注意

一本會は良品を廉價に販賣するものなるを以て必ず前金又は代金取立小包便とす
一書籍類參圓以上(雜誌を除く)申込の時は遞送費は本會に於て負擔す
一隊後備役軍人に限り多少に拘らず凡て(雜誌をも含む)遞送費を免す

明治四十年三月廿日發行(每月三日二十日二回)(定價金三錢一ヶ月六錢郵税不要廣告料一行金六拾錢)發行兼印刷人 山澤俊夫 編輯人 手島益雄 發行所 東京麴町區飯田町 愛國婦人發行所 印刷所 東京牛込區市谷加賀町 秀英舍工場

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

愛國婦人第百廿四號

IMPERIAL LIBRARY

明治四十年三月二十日發行（毎月二回五日廿日）
明治三十五年三月二十七日（第三種郵便物認可）

評議員
佐藤猶子

北海道支部幹事
伊藤ちな子

和歌山支部幹事
佐々木八千代子

發行兼印刷人 山縣俊夫 編輯人 手島益雄 發行所 愛國婦人會内愛國婦人發行所
印刷所 東京市牛込區市ケ谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN